特250
401

國體の權化
明治天皇

田中智學處述

始

國體の權化序

此篇は去る大正元年十月二十七日下野國栃木町に於て同所なる本化行學會の主催にかゝる『國民教育佛教實義講演會』にて爲せる、晝夜二回分の予が講演筆記なり、前きに本化行學會の希望により國柱新聞紙上に掲載して廣く世に頒ちたるも、時日の切迫と偶ま予の關西旅行中なりしを以て、未校閲のまゝ便載せり、然るに其後この筆記によりて甚大の教益を受けたりとの報、各地より續々として來り、吾が編輯局及び本化行學會に對して感謝するもの多々なりき、爰に吾大阪の同志は、此篇の法益多きを欽し、更らに別刊に付して一層弘布せんことを懇請して已まず、予今また痾を養つて旅寓に在りといへども、深信の誠意これを厝くに忍びず、乃ち多少の修訂を加へ、且つ小題若干を挿置し、冠注を添へて再刊に付す要は讀み易く會し易からしめんためにとてなり。

夫れ日本國體の自覺は、今の吾國に於ける最緊要事たり、國體の全發揚として、天

は　明治天皇を降したり、明治維新の大業は、西洋の文華と日進の氣運とを助緣として開き出でたる國體の花なり、助緣は自ら助緣にして、花は自ら花なり、春風よく爛漫の花を促せども、風は花にあらざるが如し。

國民の上下は、久しく國體を忘却して自己の天職を誼る、卑きを甘なひ紊れに馴れて、滔々として還り澄むことを知らず、危いかな國それ岌々乎たり。

日本國體の闡明せられざるは、獨り吾國の不幸のみにあらず、亦將さに世界人類の損失たらんとす、今に於て國體觀念の充實を叫ぶは、むしろ天然の要求のみ國體の全容たりし　明治天皇は亦直ちに國體教訓の木鐸たること言ふまでもあらじ、卽ち國體の權化として之を觀察し奉るは、所謂人を以て法を證するの一格なり、蓋くは之を讀まんもの豁然として醒起する所あらんことを、再刊に臨みて爲に一言を叙すといふ。

大正二年七月上旬

田中智學虔記

改版新裝の言葉

日本は今大東亞の密林を切り開き、太平洋の荒波を乘り越えて進んでゐる。

行手には前人未踏の曠野が横はり、千古黑暗の魔海が廣つてゐる。その曠野に指針と拜し、その魔海に燈臺と仰ぐべきは、恐れながら　明治天皇の御神光である。

道は一筋、明治の聖猷は直ちに神武建國の神謨に通ひ、二千六百餘歲不滅の國體精神は、明治天皇のみ上に凝集してゐる。一億國民が普ねくその神光を仰いで各自身邊の闇を照し來る時、戰力增强の實も自ら求めずして至るべく、世界經綸の道も亦明々瞭々たるものがあるであらう。

萬代の聖標　明治天皇、國體の權化　明治天皇、この書再び世に出でざるべからず。玆に、新裝判形を擴大して讀み易からしむると共に、他方冠註を省略し裝幀を簡ならしむる等、專ら戰時下の急に應じたり。

切に大方諸賢の聖德光揚、國體正義の普及徹底に御盛援あらんことを祈る。

（昭和十八年盛夏・天業民報社敬白）

國體の權化

明治天皇

一　世界中の驚歎推稱

此頃　明治天皇の御崩御に依ていやましに御盛德が世に知れ渡りまして、日本國民はいふに及ばず、海外各國の人々に至るまで、筆を揃へて　明治天皇の御德を賞讃致します。或はペートル大帝以上なりといひ、或は獨逸先老帝の上に出づる名君なりといひ、或はナポレオンやワシントン以上の大成功家であると云ふ如き、種々なることをば外國の諸新聞にも書き立てた、既に先達ても某新聞に見えて居つたが、ポーランドの一詩人は、明治天皇を以て世界の帝王中の帝王なりと云ふことを書いて、世界中のあらゆる帝王や大統領に其詩を送つて、世界中の帝王は　明治天皇の家來となるべきものなりと云ふことをば鼓吹した爲に、米國政府などは之に密偵を附けて非常に怖れて居るといふやうなことが紙上に見えました、さういふやうな工合に內外各國の人は　明治天皇を以て未だ曾て人間の世の中に現れたことのない大聖人である、大偉人であると云ふことをば申出しました、是は實際其通りに違ひないのであります、併し

ながら此標準といふことに就きましては、大抵は『此四五十年間の短かい間に、西洋各國が數百年掛つて仕上げた文明をば僅かな年限に美事に仕上げたからえらい』……斯ういふことで　明治天皇の御盛德を讃歎してゐるといふにすぎないのであります、そこで先づ西洋各國が數百年掛つて築き上げた文明をば四十五年の間に仕上げた、而も各國の帝王として　明治天皇ほど御艱難をなされた方はない、又　明治天皇ほど御苦勞をなされた方もない代りに、　明治天皇ほど御艱難御苦勞に打勝つて成功なされた方も何所の國にもない。

二　驚くべき事實

此に於て貴方方も爾だらうと私は推測するが、斯く申す自分なども　明治天皇を以て第二の　神武天皇であると云ふことは、既に明治二十七年に『佛教夫婦論』を　兩陛下に獻上した時に其奏疏に書いたことである、當時世人は之を詔言だぐらゐにいつたが、私は一の確信主張があつて、第二の　神武天皇であると深く信じて書いたので

あるけれども、其當時の人は之を以て一種の先づ頌德に過ぎない、卽ちお世辭に過ぎないと斯ういふ風に、現に私を知つた者や友人などでもいふて居つた、所が此頃は殆ど全國擧つて　明治天皇を以て　神武天皇の御生れ變りであるとか、第二の　神武天皇であるとか、或は　神武天皇以上の御方であるなどゝいふやうになつた、それは全く國民の眼が開いて來たのです、併しながら明治二十七年に於て『第二の　神武天皇である』といふことを公々然と明言した拙者ですらも、崩御に依て色々な事實が吾々の面前に現はれて、其一事一物零細なる報告を集めて見て、是程までに御仁慈、御威德が、圓滿に在らせられた御方であるかと云ふことを、初めて知つたことが幾らもある、勿體ないことであるけれども、吾々はさうまでは考へて居らなかつたことがあつた、それは政府の役人でも宮内省の人々でも、どういふ譯か此御盛德のことを吾々臣民に傳へて呉れない、唯『九重の上は雲深うして知ることが出來ない』とか、萬事『長れ多い』とかいつて天子樣の事は民間に知らせないやうにする、餘りに知らせないやうにすると、人間といふものは妙なもので、此所に疑ひを起す、であるから甚しきに

至つてはあられもない想像などを描かぬとも限らぬやうなことがあつて、吾々は大に遺憾なりとして居つた、併し色々な方法に依て、吾々は　明治天皇の御盛德の優れさせ給ふたことを承知して居つたが、この頃方々から傳はつて來た事實を集めて見て驚いてゐる程の件は、是までとんと知らなかつた、マア『天子樣が人民をお愛しになる』、『仁心が深く在ます』と云ふやうなことは、如何なる場合でも君主の德を褒める時は、約ね常套語の如くなつて居る、『上の思召』など云ふ事も、矢張る其輒か知らんといふ考も無いではなかつた、所が其事が事實として現れて來た眞相を見ると、實に想像より以上であつた。

たとへば其一例を擧げると、しつかりした醫者から聞く所に依ると　明治天皇樣の御病氣であらせられた尿毒症といふものは非常に苦痛な病氣であるさうです、然るに御發病以來一旦人事不省に御陷りになつてから、餘り何も仰せられなかつたさうである、併しながら、少々御輕快になつた際に侍臣が何か御伺ひをすると、唯一言、侍臣に對して『米はどうなつた』と御尋ねになつたゞけ、其前後に於て何等お言葉がなかつ

た、聊かも御自分の御病氣に就て苦しいと云ふことを仰せられなかつたといふ、元來陛下が非常な忍耐克己の御方であらせられると云ふことは、御平生に於ても伺つて居つたが、御大忠中偶々口のおきけになつた場合に『米はどうなつた』と云ふことを仰せられたのは何故かと云ふと、其前から米價騰貴に由て、細民が難澁して、殆ど東京市中の如きは社會的問題にもなつて居りました、其時に當局の大臣よりも、東京府の知事よりも、東京市長よりも、警視總監よりも、農商務大臣よりも、何よりも一番　明治天皇樣が此米の事件に就て、宸襟を惱まさせ給ひて、此事に就て研究をして居らしつた、何事か研究の結果、仰出されることでもあらうと云ふ所であつたかも知れない、其中にあの如な御病氣にお成りになつた、一旦御自覺が戻つて御意識が鮮明にならせられた、この雲間から洩れた月の間に仰せられた一言は、御自分のことでもなければ畏れながら　皇太子殿下の事でもない、唯『米はどうなつた』と御聞きになつたと云ふだけの御一言である、是は今私が諸君にお話するやうな鹽梅に、私に傳へて呉れた新聞紙は、さういふ意味で書いたのではない、御盛德の一

斑として月並的に書いたのでありませうが、私は之を見て驚いた、さうましまさうとも思つたけれども是程までとは思はぬ、それで其當時私は甚だ拙劣ではあるけれども自分の所思を叙べる爲に

あな尊と病のうちも民の爲め
米の價を問ひませしとや

といふ腰折を詠んでお手向け申した、どうです、凡そ君上としては人民を憐れむといふことは、自分の家來、自分の子供であるから、可愛がると云ふことは當り前だ、當り前だけれども、何と御自分の病痛を御忘れになつても、唯お忘れにならなかつたのは細民が米の高いので困つて居るといふことに就て、深く宸襟を惱ませ給ひたる所の御一念が遺つて居て、御發病以來御崩御になる迄も他の事は仰せられないで、唯この一言を遺して御崩御になつた、是れ形式的でない、尤も深い御仁心の表示である。

三　天地同體の御性格

もう一つの事實は　陛下は大層行儀のいゝお方だといふことは承はつて居た、是は一體日本の　皇室の特徴らしい、私曾て村雲の宮樣に應接したことがあつたが、現に私が曾て京都の本國寺で演說をした時に聽きにお出でになつた、前後四時間の演說を膝も崩さず端然と聽いてお居でになつた、前に坐つて居つた京都府の高等官達も非常に困つて居つた樣子であつた、御所へ行つても數回お目に懸つて、色々な長い談話をして、私はその間に度々體をもぢ〳〵して膝を曲げたり色々なことをしたが、村雲樣は端然と坐つてお笑ひにもなるけれども、體は少しも動かされぬ、それを或人に話したら、それは村雲さんばかりぢやない、總じて　皇族はみんな爾うだといふことを聞いた、其つかさとも謂ふお方だから行儀のいゝお方であるといふことは承りもして居つたし、想像もして居つたが、金子堅太郎君の談話だか何だかに書いたのを、諸君も御覽になつたかも知れぬが、憲法の會議をする時に、一年有餘に亙つて毎日のやうに會議をする、他の人は頭が痛いとか、或はどういふ事件があるとかいつて、休んだこともあつたが、　明治天皇ばかりは一日も御休みになつたことはない、一度會議中に　内親

王の御病氣が非常に重らせられて、御危篤であるといふ報が來たので、伊藤公爵は、會議を見合せませうかと申上げた所が『苦しうない』と仰せられて、其會議を續けて早終ひにして御退けになつたきり、一日も御休みにならぬ、さうして熱心に憲法制定に就て、諸の當局者達の議論を御聽取になつて御裁斷なすつた、その年月は一年半に亙つた、それだけはまだしも、一國の大事を議する時で、憲法が一つ間違つたら　明治天皇が上　祖宗に對し下萬代の蒼生に對しての御責任もある、容易ならぬ事であるから御勉勵なされたと云ふことはそれ程驚かない、然るに一日もお休みにならぬのみならず、　陛下に差上げてある御椅子は肱突の附いたお椅子である、　皇族方の椅子は皆さうきまつて居る、(私共にも　皇族方がお出でになることもあるので、普通のでは行かぬと云ふものだから其式に據つて當局者に問合はして拵へたが、脇に肱突がある、私も腰をかけて見たいけれども腰をかける譯にゆかない、フワリとした誠に好さうな椅子だ)それが差上げてある、天子様だから其位のものは當り前だ、然るに一年有餘に亙る永い間一遍も之へ肱を御凭せになつたことはない、ちやんと眞直にして

居らしつたといふ、此記事を讀んで私は體が慄へた、是は諸君考へて御覽じろ、一年半といへば隨分長い、何も御遠慮は入らない、一國の主、而も中興の明君、どれだけの事をなさらうとも誰も御贅澤だと申上げる者は一人も無い、然るに此憲法といふものは自分一人のことばかりではない、上　御祖宗から下萬民の安危休戚に關する一大事であらせられるから、異常なる御熱心を以て端然として議席にお臨みになり、其討論決着を聞召される、吾々ならばぢき色々なことをする、寢ころんでも聞兼ねない、然るに肱突のある椅子を差上げてあるのに肱をお凭せになつたこともなく、端然として居られる、又窓から西日がさして御足へ日があたつても暑いと仰せられたことがない、伊藤公始め起て窓を塞いで陽のさゝぬやうにして差上げる、斯う云ふ譯、マア盛德を數へれば數限りもないが、私は今急所を押して一つ私が驚いたことを申した、どうも　天子様だから安座でもおかきになるだらうと思ふけれどもそんな事はない、どうです諸君、肱突のある椅子を諸君に上げて肱を突かずに居られ升か、私には迚も居られない、　陛下がさうなされたから、こちらもやるまいと思ふけれどもさうは行か

ない、此に於て私は成程どうも　明治天皇の御盛德といふものが海の内外に溢れて、さうして上　天照大神以來　神武天皇以來、　皇祖皇宗の大統を享けさせ給ひ、遺憾なく滿天下に其光輝を揚げさせられ、億兆萬民をば斯くの通りに立派な開明に誘ひ導いて、我等に光と力を御與へになつた此御威德は決して偶然ではない、たゞ事ではない、何か此所には一つの偉大なる理由がなければならぬと云ふことを、私は考へ出したのであります。

それから最も驚くべきことは、　陛下の御文藻である、此頃は何かへボ小說の一つも拵へて青年雜誌にでも出すと忽ちに文士氣取、何か妙な文士の會でも出來てすぐ文士がるといふ樣な者が幾らもある、都大路はさて措いて、隨分鳥も通はぬ僻陬の地に至つても、さう云ふ輩が續出して、世の心ある者をして眉を顰めしめてゐる、然るに萬機の政に當つて日々の御精勵、日曜日にもお休みにならない、夜も十一時頃まで用を爲され、暑いからと云つて湯治に行かれるではなし、寒いからといつて暖かい所へ行かれるではなし、方々に離宮もあらつしやる、御用邸もあらつしやるにも拘らず、更

にお出掛にならない、何も儉約でお出でにならぬではない、お忙しくて行けぬ、さう忙しいのは何の爲であるかといへば則ち此國を治める爲に忙しい、所謂人民の爲に忙しい、それ程忙しければ、吾々なら斯う忙がしくては何も出來ぬと云つて五色の息を吐いて大騒ぎ、戰爭の濟んだ當時などは、隨分澤山の勳章を渡さなければならぬので之を一々御直書になつては大變だから、適當の方法を以て印刷でも致して御璽だけ捺したら如何と申上げた所が、いやさうでない、是等の人の戰つた事を思へば朕が名を書く位の事は何でもないと仰つて一々御自分でお書きになる、其位だから隨分お忙がしい、其忙がしい中で日々上は道のことより、神のことから、思想上のこと、下は風物人事百般のこと、凡そ眼に見、耳に聞く所の事柄は、皆三十一文字の歌として、日に何十首となくお作りになつて、九萬幾首殆ど十萬の數があると申す、どうです、日に十づゝ詠んでも年に三千六百しか詠めない、十年に三萬六千吾々が腰折の一つか二つ詠むにも、三日か四日考へて非常に頭が痛む、それが此繁劇の間にあつてお詠みになる、此御製ばかりでも錦を綴り珠をづらねたる立派な御文藻、而も之を人にお示し

にならない、さういふ御立派な御文藻があつても決して歌よみだといふやうなことはお思ひにならない、歌といふ觀念もお持ちにならぬ、唯「道」といふ觀念より外にお持ちにならぬ、道の言葉であつて風月の言葉でないといふことを仰せられた御製がある、是だけでも驚くべきである、大體十萬の歌があるといふだけでも大したもの、それだけでも人間一生のあらゆる智の精力を絞つてもむづかしい、昔から山部赤人とか人麿とか貫之とか偉い人が幾らもあるが、金聲玉音とも謂ふべきものが十萬からあるといふことは聞かない、それだけでも世界一だ、それを喞氣にもお出しにならぬと云ふに至つては益々驚いたものではないか、其他　陛下の御盛德はどちらからどう云ふ風に賞讃し奉るも、人間の言葉や文字では現はす事が出來ない、是れ抑々何であるかといふと、之が問題である。

是は修養の結果であると云ふのと、天禀の然らしむる所であるといふのと、先づ此二つの問題がある、尤も御修養の厚い御方であると云ふことは、世間に既に御崩御によつて發表せられました副島伯への御宸翰に依ても知れる、『朕道を聞き學を勉む豈一

二年に止まらんや將に畢生の力を竭さんとす』と云ふことを仰せられた、副島伯が病氣又は事故に依てゞあらうが骸骨を乞ふて御役御免を願つた時にお止めになる時の御宸翰、身を山林に退くごとき事は朕斷じて許さぬと仰せられて、副島伯を師と仰いで道を聞かうと仰せられた、『朕道を聞き學を勉むるは豈一二年にして止まらんや將に畢生の力を竭さんとす』どうです、少しばかり何か學校でも卒業して文學士だとか何學士だとかになると、忽ち本を讀むことも思想を練ることも放抛らかして、僅の月給に嚙り附て、結局何れかの淑女と緣組でもしようと云ふので求婚の廣告でも出す、斯う云つたやうな人間が多い、昔の書生と云ふものは五能も叶はぬ癖に直き『天下國家』と云ふことをいつたものだが、此頃の書生に『天下國家』などゝ云ふ者も無い、マア良い茶でもいれて羊羹でも食はうとか、薩摩芋でも食はうとか、然らずんば女の後を追駈けることのみを考へて居る、羊羹や薩摩芋や女や小說にのみ親んで偶に天下國家などゝ言ふものがあると、それを氣狂ひのやうに思つて居る、それでも羊羹や女の中はまだ宜いが終ひには泥棒をする、此間やう〳〵警視廳も眼が覺めてジゴマの活動を

止めたが、私は初めて見た時さう思つた、怪しからぬことをやる、それでなくてさへ盗人根性のある者を煽動して『泥棒になれ泥棒になれ』と云つて教へるんだから堪らない、そんな今の世の中である、所が　陛下は『朕道を聞き學を勉むること豈一二年にして止まらんや將に畢生の力を竭さんとす』と仰せられた、是が御齢三十前後の時の御宸翰、其位であるから非常に修養の深い御方であると云ふことはもう明かだ、あの位の大重病であるに拘らず、痛いとか辛いとか云ふことを一言も仰せられないと云ふことは、克己心の強い御方と云ふことも分つてゐる、それでは副島伯に聞いたり、元田永孚に聞いたり、猪熊夏樹に聞いたり、穂積八束に聞いたりして、修養を積んでえらくお成りになつたのであらうか、それとも何か別に書物でも讀んで御工風なされたのであらうか、或はさうでない、お生れ付きで天禀で在しやつた、即ち天の成せる聖人であると云ふのであらうか、先づどつちか此の二つの内に持つて行かなければさしづめ勘定が合はぬ。

御生れ付きの大聖人で在しつたものであらうか、或は非常に御勉強なされて、『克く念ふて聖となる』とあるから、勉強をなされた結果あの位な大圓滿なる盛德を獲得なされたのであらうか、但しは外に大理由があるか、此解決を與へることが今日に於て明治天皇に對する御報恩、國家に對する必要なる條件であると考へた。

四　二問題に對する解決を要す

そこで此解決の先鞭として、私は口で言ふよりは行ふ方が早いと思ひ、此間自宅に於て九月十六日より九月二十四日に至るまで非常な大規模な方法を以て　明治天皇の御爲に追弔の大會を開いた、其大會に於て法華八講といふものを行つた、これは古昔宮中に於て行れた『法華八講』の型を取りまして、さうして所謂純然たる日蓮主義に依て開顯せる眞正の法華八講を行ひました、其法華八講の主眼とする所は、一々以て明治天皇の御盛德をば經文に依て讃嘆する、斯う云ふ組織で行つた、詳細は私共から發行してゐる『國柱新聞』に記載してある、今其内容を御話する時間がないから、有志の方はそれに就いて御覽下されば、寫眞もあつて能く分ります。

そこで　明治天皇崩御以來、其解決として言論に訴へて公衆の面前で述べるのは今日が初めてなのである、勿論　明治天皇は御修養を能くなされた、學問もなされたに相違ない、御修養は篤かつたに相違ない、けれども　明治天皇の御盛德は普通の漢學者や國學者に依て敎へられ、普通の佛敎家に依て敎へられたそんな事に依て其眞似をして出來て來た修養の結果ではない、西洋の學問でも印度の學問でも、今ある所の佛敎の如きでも、決して　明治天皇の如き偉大なる人格をば作り得る力がない、であるから修養の結果此大聖人となつたのではない、然らば　明治天皇は御生れ付きの聖人かといふと天性も勿論、えらいお方に違ひない、天性がえらい、御血統は申分がない、お父樣が　孝明天皇であらせられ、ずつと遡つて行けば其御血統の中には　聖德太子のやうな聖人もあれば　神武天皇の如き聖人もある、其以前は神樣だ、神樣の御末だから其遺傳があるに相違ない、普通の方でないことは分つてゐる、今の行儀のいゝなどゝ云ふことも矢張神樣の御遺傳であらう、尤も吾々だつて神樣の子孫には違ひないけれども、途中から色々なものが這入つたものと見えて胡座をかいたり何かするやう

になつた、吾々は白狀するけれども全く自墮落だ、汽車に乘つても直き毛布などを敷いてごろりと横になる、あれは腰を掛けるやうに出來てゐるのにそれへ横になる、寢たければ寢臺を買へば宜い、ごろりと横になつて寢る、所が新たな人が來て鞄などを持つて困つて居ても、吾々は德義心に責められるから不承々々な面をして起きるけれども、（中には起きないで人が這入つて來ると餘計ずつと伸ばす奴がある）、是はみんなさう云ふ惡い習慣が附いたので、根本は人が來て困るから起きてやらうかしらと思ふのが當り前だのに、圖々しく其本性の方を伏せて習慣の方を表へ出して置く、然るに　明治天皇の如き行儀の好いお方は神樣の御末であるからといふことは明かであるが、單にその天禀の御生來ばかりではない、それよりもずつと大きい堂々とした理由がある。

兎に角天禀の御盛德はあらつしやるに違ひない、けれども凡體を以てお生れになつた、血統は神樣の血統だつて、凡體を以てお生れになつたのだから切れば血が出る、時候の變化に依ては御病氣にもおかゝりになる、矢張り吾々と同じ體は凡體だ、其凡

體までも、唯神様だといふ事はない、承はれば御幼少の時には隨分　明治天皇様も我儘で居らしつた、人の頭をぽか〳〵お擲りになつた、吾々と同じことだ、御青年の折には隨分御立腹もなすつて侍臣共が困つて、皇后陛下から申上げてやつとお解けになつたなんど云ふこともあると申すことだ、それでこそ有難い、それでこそ貴い、　明治天皇がおぎゃあとお生れになつてから三墳五典の學問に通じて各國の事情はそらで知つて居ると云ふやうな鹽梅の御方ならば、是は一種の化物だ、化物でない誂向きの吾々と同じ人間であつた、同じ人間の中で優れて居らつしやる、それがあれだけの大盛德を養成なされたと云ふことは、それならば修養に依るんだらうと云ふ前の問題になる、所がそれでもない、ハテナ修養に依て德を成されたのでもなければ、お天性でもない、何だらう、此所だ！　此所まで話を持つて來れば、ちよつと水を一杯飲んでも可い……。

修養でもなければ生れつきでもない、それでどうしてあれだけの聖人が出たか、先づ此に於て　明治天皇の御聖德と云ふことを諸君も認めてからでなければ、此問題に

對しては分らぬ、唯火事があつてお金を下すつたとか百五拾萬圓を濟生會へ下されて貧民をお救ひ下すつたとか、其位の事などは數の中に入れてない、　明治天皇の大聖人たる事は別にある。

五　三　大　事　續

明治天皇が大聖人であると云ふことを斷言して世界的に憚らざるものが三つある、それは何であるか、第一に人間として人間に正しき道をお授けなすつた、第二には政治として正しい道を政界にお與へになつた、此二つは誰でも分る、考へれば分つて來る、能く深く思ひを致さぬから分らぬ、能く思ひを致せば此二つは如何にも鮮明だから分る、もう一つちよつと分らぬのは何だと云ふと、其人間の道といふものの元がある、政治の道と云ふものの元がある、此人道の正義に政道の正義と云ふものゝ其もう一つの元をば確立なされたと云ふことは、殆ど釋迦基督等の大聖人と匹敵して世界に指を折るべき所の偉大なる聖人である、それは何である、所謂第一は「勅教」の御宣

示、第二は「日本憲法」、扨第三は……則ち「國體の御自覺體現」である。

六　國體に對する深き御自覺

そこで私が兩方をば解決するのに　明治天皇の御盛德は御修養から得たのでもなければ御天性から得たのでもない、御修養も御天性も幾らかは手傳つて居るけれども其骨と云ふものはさう云ふ譯でない。

卽ち　明治天皇は深く國體といふことを御自覺になつた、日本の國體といふことを深く御自覺になつて、我は此國體の把持者である、國體の綱を持つ役である、その保護者である、であるから朕が一つ間違つたら大變である、朕が一つ遣損つたらば此六千萬の同胞を窮地に陷れるはまだしも、世界の何物にも換られない我　御先祖代々の、　皇祖皇宗の大統をば地に落して仕舞ふ。

神武天皇から數へて、人皇になつてからでさへ二千五百年、此二千五百年掛つて積來つたる人間世界の大沽券、遠く其淵源を探ぬれば　天照皇大神より嫡々相傳、世界人

類に向つて正義正道の大權を握つた御血統だ、さつきも志村が申した通り世界中の人を救ふ爲に世界中の人が持たねばならぬ道を持つて、それを保護して世の中を救はうといふ、斯う云ふ爲に天然自然に世の中に立つて居る、世界を保護し維持する家だ、私が之を盛んに言つて居るから私の新發明のやうに世間では誤つて居るけれども、私は發明する程の智慧を持つて居らぬ、日蓮聖人に依て是は分つた、其內容を言はなければ日本と云ふ國は何所がえらいか分らない、日本のえらいのは、皇統連綿萬世一系と直に言ふが、萬世一系天壤無窮と云ふ事には其根源がある、其根源が貴い、其は何か「道」といふ事である、則ち世の諸の邪に曲れる汚き私の事どもを正して世を救ふ爲に建られた「道の家」である。

世間に道路の普請をしたとか堤を修めたとか云ふ、公益の爲に盡したと云ふて褒賞する、是は自分のことを偖置て世の中の爲を計つたと云ふことに依て其德を認められた、多くの人は先づ人の方は侵しても自分の方を宜くする、こつちの畑とこつちの畑とあると、一鍬づゝ隣の土をこつちへ取らうとする、翌日は隣から出て又一鍬取る、

是が兩方出會うと喧嘩になる、國と國との間でもさう云ふ喧嘩は幾らもある、バルカン半島の事件でも、蒙古西藏のことでも皆それだ、巡査が來て此涼臺をもう少し引込めろとかお前の所の車が出過ぎて居ると云つて注意する、一時は引込ますが巡査が行つて仕舞ふと又出す、是は皆自分の利益を計るといふことから起るので、自分を潰して仕舞つては何にもならないから、自分を保護する爲に戰爭するといふことは必要ではあるが、自分を立てやうとて他を侵略すると云ふことは、利害得失の問題から言つても、人道德義の問題から言つても損だ、なぜ損だといふと自分といふものは獨りで立つものではない、先づ自分と同じき者には夫婦もあれば兄弟もある、上の者には親とか主人とかゞあり、下の者には子だとか家來だとか云ふ者がある、下にも色々な者があり、上にも色々な者があり、横にも色々な者がある、親とか先祖とか主人とか云ふ者が上にあり、下には又自分の子だの孫だの家來だのと云ふ者があつて、上からは押へ下からは支へ、横の方には、女房だの亭主だの友達だの兄弟だのが控えて居るので、どつちへも倒れない、自分一人で立つと云ふことは出來ない、所が其自分を立て

やうと云ふ爲に、その上や下や其隣近所を亡ぼして仕舞ふ、さうして自分だけ宜ければ宜いと云ふので、相欺いて他の者をば壓倒することを考へたならば、其壓倒した目的は達しても自分が凭掛る所は無くなつて仕舞ふ、大地が無くなつて仕舞つたら自分は立つことが出來ない、天が無くなつて仕舞つたならば自分を覆ふものが無い、天も地も自分の爲め風も水も自分の爲め、山野も大海も己れを養ふ爲に天地間に存在してゐる、何所の土を掘つても水が出て來て掘る者が之を飲むことが出來る、何所から掘つて來ても飲むことが出來る、太陽がある、日向へ出さへすれば誰の頭へでも光があたる、太陽の方ではあてやうと云つて待つて居る譯じやないけれども、外へ出てあたることが出來れば太陽も矢張り自分の爲にあるので、是が無くなつて仕舞つたら大事件、水が無くなつても火が無くなつても地がなくなつても大事件、己れを安んぜんが爲には他の周圍の色々なものを安全にして置かなければならぬ、唇破れて齒寒し、そこで唇を保護して置て齒を庇ふ、是は利害問題であるが、利害問題から言つてさへさう云ふ譯のもので、算盤を彈いて見てもさうなつて來る。

人はどうでも構はぬと云ふ考へを以て世の中に處せんとし、甚しきに至つては親子の間にも詰らぬ爭ひをする者が幾らもある、其で自己を立てると云ふことは偶ま自己の滅亡である、自分の富を增さうと云ふことの爲に一鍬隣の畑作をこちらへ奪ひ取つたと云ふことは、それだけ自分の地面が殖えたと思ふのが誤りで、之に依て信用を墜し人の怨みを買ひ己れの德操を殺ぎ、自分みづからも始終鬱々として不快に暮すと云ふ所まで追詰めて來たならば己れを亡ぼす所以が明かになる、是は己の爲に利益を計ると云ふのではない、己の滅亡を計るのである、斯う云ふことに考へついたならば、そこで所謂博愛心が起きて來る、是は極初等の問題だ、博愛の一年生だ、それから段段やつて行けば佛敎で說くやうに『法界は皆一つの體である』と云ふ大悟道界に至るから、他の者をいぢめても自分は成立たないと云ふことが分つて、公々然と我身を提供して世の中の爲にならうと云ふ立派な心が出る、さう云ふ立派な心が起ればどうです、一軒の家にさういふ人が一人出來れば其家はどうなりますか、さういふ子が出來たら其親は何と思ひますか、さう云ふ女房が出來たら其亭主は何と思ひますか、さう

いふ家來が出來たら其主人はどう云ふ感化を受けるか、一家仁なれば一國仁に興るでその家は藹々として眞に春の如き暖かき風が吹くに至るであらう、それが卽ち道の人なんだ、國も其通りだ、道の國と云ふ國が無ければならぬ、道でない國と云ふのは他の國をば壓倒して、あいつは弱さうだからあれを取つてこつちの領分にしようと云つてやるのが、丁度隣の畑を一鍬取つて來るのと同じやうな筆法である、今の列國などといふものは、文明國だとか先進國だとか云つても、腹の中では皆さうぢや、ちよつと軍艦や鐵砲や法律や議論や交際や色々なもので裝飾してある、山師の開業式みたやうに酸漿提灯や何かぶら下げて飾つてあるから良く見えるけれども、腹を割つて見れば人の國を取る盜人だ、何處か弱さうなやつがあれば取つて來やうと云ふ考へ、自分の方を取られると怒るが、自分の方を取られないで一方を取れば、お前がそつちを取るのは默つて居てやる、其代り己れにこつちを寄越せと云ふやうなことで同盟が成立つ、何々同盟と云つてこつちへくつ付いたりあつちへくつ付いたりする、日英同盟なんと言ふかと思ふと日露同盟が出來るかも知れない、今の處では日本は娘一人に婿八

人で、日本さん〳〵と云つてやつて來る、殊にバルカン半島の事件がどうなるか、トルコで獨立を失ふやうに至つたならば、日本支那の外東洋に獨立國は無くなつてしまふ、だから支那の問題が世界各國を擧げての大波瀾の問題になる、其所へ行くと日本だ、日本は座頭だ、千兩役者で、露西亞の方からも日本さんと云つてやつて來る、英吉利の方でもミストル日本とか何とか云つてやつて來る、佛蘭西も其通り方々から日本と仲を好くしてやらうと云ふやうな風になつて一大騷動が惹起らぬとも限らぬ、是皆利害得失の問題で、文明だの何だのと云つても皆それだ、『神は我等と共に在り』と獨逸皇帝が露西亞皇帝を見舞つた時に言つたさうであるが、耶蘇教の神様は知らぬけれども、幾ら人の好い神様だつて泥棒と一諸にされては怒るだらう、弱い者を壓倒する、少し何か事件があるとそれに乘じて兵をやつて、貧乏な奴に金を借りろ金を借りろと云ふ借りなければ承知しない兵力の上で金を貸すと云ふ、貸せと云ふのなら分つて居るが借りろと云ふのだから是は餘程をかしい、往古は美人などを贈つて色仕掛で陷れやうと云ふ樣な手段までも行つたものである、實に驚くべきことで、一方に於て

は『神は我等と共に在り矣アーメン』とやつて、一方では泥棒をする。

それだから　神武天皇は此日本を御建てになる時に、斯くの如き事が永久に人間世界にあつては大變だから之を悉く亡くして仕舞つて、一の聖國主義の下に寄せなければならぬと云つて、正義の爲に此國を建てられた、此國の魂をば　神武天皇は「正」と仰せられた、「正」そのものには種がある、何でも種のないものはない、瓜の種を蒔けば茄子は出來ない、瓜から瓜が出て茄子から茄子が出る如く種と云ふものがある、日本と云ふ國の種は此「正」の一字、日蓮聖人は、「立正安國」と仰せられ、　神武天皇は『暉を重ね、正を養ふ』と仰せられた、正を養はんが爲に天日嗣の位に卽くぞと仰せられた、天照大神は「治」と仰せられた、「治」と云ふことは物を整理すること、物を整理するには中心を定めて掛らなければならぬ、中心を定めなければ整理は付かない、物の土臺目安が分らなければ治めることは出來ない、　天照大神は「治」の一字を以て元とせられ　神武天皇は此國體の內容を「正」の一字を以て示された、日蓮聖人は『正を立てる』と云ひ、釋迦如來は『正法を以て國を治める』と仰せられ、觀

普賢經の中に『正法治國』と云ふことがある、妙法蓮華經の「妙」と云ふことは、羅什三藏は之を妙と飜譯しましたが、天竺の言葉では『薩達磨芬陀梨伽蘇多覽』この「薩」とは卽ち正しいと云ふことであるが、羅什三藏は此「正」へ少しうま味を出す爲に味淋をかけて「妙」としたが、其內容は正の字である、今私が此所へ來て札を見たら「國民教育佛教實義演說」とある、宜しい、國民教育に違ひない、佛教實義に違ひない、實義の實の字は寔と云ふ字、寔と云ふ字は昔の日月の「日」と云ふ字と通用したものです、之を見ると日といふものも矢張り「實」である、物の中心を日と云ふ、天界の中心は日である、形で見ても⊙、圓い物があつて眞中に點があるのが日の字、唯點ばかり居るのも退屈だから少し光つて見ようと云ふので⊙周圍へ光を現はした、此眞中の點は何だらう、團子だらうか饅頭だらうか何だらう、是は「正」と云ふ字だ、㊟、此國の先祖は　天照大日靈貴と云つて日の神樣、　神武天皇は神日本磐余彥尊と云ひ我は日の神の末なりと　神武天皇自から宣言なすつた「日」の子孫であるから、日に向つて戰爭をしてはならぬと云つて、日を後に背負つて長髓彥を御征伐になつた、

此國は日の本と書いて日本、國體を解決する爲に現れた日蓮聖人は、自ら日蓮と名乘られた、是も阿父さんが日兵衞とかいふので日蓮といつたのではない、『自解佛乘』とも謂ふべし』と云つて、譯があつて日蓮と云つた、お釋迦樣の名はと云ふと「日種」だ、日の種と云ふ人が說いた法華經がこの日本國體の內容ぢやと云ふことを日本へ弘めに出た聖人が「日蓮」その國が「日本」、其御先祖が「天照大神」、皆「日」だ、日本人の頭がカン〳〵燒けて居る譯でも何でもないが、かくの如くすべてに日を理想として居る、日と云ふものは天象の中心だ、物には主が無ければならぬ、車で言へば軸だ、中心が無ければならぬから、一切萬物の中心を以て物を整理すると云ふ理想を此國の心とする、それが日本の國體である、であるから其心持で萬事の物をば集めて來て、それを正しく整理して行くと云ふ國體が其所へ出て來る、その國體は「正」といふことで、此國の文明の一切に亙つての「種」である。

七種の教

佛教はこの「種」の教である、但し種に就ては「種」そのものと、それから「種」をそだてる方法準備との二つがある、即ち「權」と「實」との二つである、そこで權と云ふのは假だ、方便だ、權の字ははかると云ふ字だ、權衡と云ひませう、「秤」がなぜ權だと云ふと、秤と云ふものは自分の目方と云ふものはきめて置けない、自分の目方をきめて置く秤はない、はかる方の品物次第でどうでもなつて居なければ物を量ることは出來ない、十匁の物が出て來れば十匁の所へ分銅をやる、百匁の物は百匁の所へやる、百匁の物には百匁、五十匁の物には五十匁の所に分銅が行くから「秤」だ、秤自身には目方は無い、然るに秤の分銅が己れは百匁にきまつて居る、五十匁の物が來たつて量らぬと云つたら秤の役に立たぬ、權といふのは假だから甘い物が好きなら甘い物を與へ辛い物が好きなら辛い物を與へる、子供に物を教へるやうなもので、『此所までお出で甘酒進上』と云つてやる、それが量る、向ふをはかつて向ふに應じて目方をきめる、であるから實際の一定の道ではない、『佛教方便多きに居る』と云つて十のものは九までは「權」、いつたい佛五十年の說法中、八年の法華經を除くの外は皆「權」だ、

是は私がきめたのではない釋尊が既にきめたので、『已に說き今說き當に說かん』是皆權教、法華經のみ實教だ、種々に法を說くのも方便の力、五十年の中、終の八年だけの說法は眞實を現はしたが、四十餘年の間眞實を顯はさない、是は何の爲かと云ふと、さうしなければ人間の整理が付かない、法を說くのにも人間の整理が付かなければ說くことが出來ない、たとへて見ると佛教の眞實と云ふのは「種」のやうなもの、「權」と云ふのは種を下す準備に土を柔かにして肥料をやつたり草を採つたり水を入れたり耕したりする方法のやうなもの、肥料をやらなければ物は出來ないし、能くうなはなければ物は出來ないけれども、唯うなつたばかりでは米は出來ない、どんな名人の百姓が朝から晩まで三百六十五日田をうなつたつて「種」を蒔かなければ米にはならない、種が實教じや、色々と田をうなつたり草を採つたりするのが權教だ、それを「準備」も「種」も一つにして佛法と云へばオンアボキャーでも南無阿彌陀佛でも皆同じ事と言つて仕舞つて『宗旨論どつちが負けても釋迦の恥』『分け登る麓の道は多かれど同じ雲井の月を見る哉』法華が宜いものは法華、念佛が宜ければ念佛、穩かにしたら

よからうト斯う云ふやうなことを悧巧さうな馬鹿が言つてゐる、元々それ等は佛法を學ばぬから分らぬ、種も肥料も一緒にして仕舞ふ、そんなら彼等は肥料を食ふか、米へ肥料をかけるより飯へ肥料をかけたら尚ほ宜からう、鰻飯や親子丼と云ふのは聞いたが黄金飯と云ふのはまだ聞いたことはない、其所なんだ、「準備」と「種」と二つあることを知らなくてはいかない、準備を種だと云ふから承知しない、種が無いと云ふことはない、日本の種は「正」の字だ、法華經も「正」の字、先刻山川が「本化佛教と日本國體」と云ふ題で演說した、時間がないので十分に話が出來なかつたが其ことだ、日蓮聖人が現れて法華經の正義を以て日本の國體とする、日蓮主義と云ふものは日本人の宗旨だ、日蓮宗の宗旨だと思ふからいけない、法華宗のお祖師樣だと考へて居るから間違へる、此宗旨の人もさう云ふ風に思ひ、おらが方の宗旨の先祖とこんなやうに言ふが、日蓮宗のお祖師樣ぢやない『日蓮は何れの宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず』とあつて、法華宗などいふ一團の特殊部落的のものを拵へて其親方にならうと云ふ考はない、『我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船

とならん、等と誓ひし願破るべからず』是が日蓮聖人の思召で、「身延の柱」となるとも「池上の柱」となるとも書いてない、「日本の柱」だ、さうして見れば日本の祖師である、日本の祖師であるから、私は日蓮聖人をば「國聖」と云ふ、日本國の聖人と云ふことだ、さうすると亞米利加の聖人とか、英吉利の聖人とか云ふ者もありさうに思ふが、日本と云ふ國は世界を救ふ爲に出來た國である、法華經が世界を救ふ爲の教であるから、世界を救ふ爲には、先づ日本が道の國であることを固めねばならぬ、故に日本が世界の中心たる事、及び其「國聖」を知ることに力を入れるのである。

八　種の教の師導者

上人は此國に承久三年の翌年卽ち貞應元年に御出現になつた、承久三年には日本が一遍國體の上に於て潰れた時だ、國はちやんとして居つたが、北條義時が　三天皇をば島流しにし奉つた、陪臣が國政を執つて天子をば廢立するなどゝ云ふのは冠履顚倒も甚だしい、此國體の大瑕瑾の現れたのは卽ちこの承久三年である、其翌年日蓮聖人

が御降誕あつて遂に世界第一の本尊を建立した、その本尊の中心たる中尊下に日本の先祖を列ねて世界の先祖とした、天照八幡の兩神は日本の先祖であると同時に、世界の先祖であると云ふことを唱導して、日本建國の趣旨と同じ意味で法華經を以て世界を統一すると云ふ、國體の根本に依て之を主張せられた、それが「種」の方だ、種が良くなければならぬ、「肥料」も必要ではあるが「種」を蒔く事を忘れたならば何にもならない、道德も政治も經濟も結構である、凡そ世の中にある所の人間に入用なものは皆結構であるけれども、それは「種」の爲に皆結構である、種の爲に入用である、肥料も結構、田の草採るのも結構、水をやるのも結構であるけれども、それは種を育てんが爲にやるのであつて、「種」といふものが無ければ幾ら肥料をかけても何の役にも立たぬ、此に於て諸君は「種」とは何であるかと言ふであらう、自分が是から、說かうとする種とは日本の國體である、日本の國體は「正」の一字を以て現はすべきものである、その內容は正しく日蓮聖人によりて傳へられた法華經の正義である。

九　種の敎の體現者

我國中興の英主たる　明治天皇陛下の御盛德が、果して御修養に出でたるものであるか或は天禀の御性質に出でたものであるかといふ問題に就て、自分はさうでない、修養から來つた御盛德でもなければ又御天禀から來たと云ふばかりではない、卽ち是は　陛下が深く國體といふことを御自覺なされた、其發表が斯くの如く盛德となつて現れたものであると云ふ解決を下して、我日本國の今日及び將來に於ける、吾國民の國家的大覺醒の初步とせんければならぬと云ふ覺悟を以て、これを講ずるのであるから、諸君も深く思惟して戴きたいのである。

そこで種の敎の體現者卽ち此國體の權化！「權化（ごんげ）」と云ふことは假に現れたるものといふことで、卽ち佛語に「權化」とか「權現」とか云ふ事がある、（何々權現等）權現といふのは矢張り假に現はれる、天上の一月が影萬水に浮ぶが如くに一つの如來の德から種々樣々な形を現はして人を敎化すると斯う云ふので、佛が佛の御自前の形を

現はさずに他の形を現はして佛のことを行ふと云ふ場合に「權現」と云ひ或は「權化」とも云ふ、佛でなくても菩薩でも、觀世音菩薩は三十三身に身を現ずるとあつて、或は天の大將軍の身を現ずることがある、或は羅漢のやうな身を現ずることがある、或は女の身を現じて人を敎化する、道の宜きに從つた場合の利益ある體を現じて人を導く、是が觀音の三十三身、妙音菩薩は三十四身と云つて、これも色々の身を變現して人を敎化すると云ふことが佛經に說てある、それを權現と云ふ、昔神樣を尊んで權現と云ふ、何々大權現、富士淺間大權現、或は家康なども神に祀つて東照大權現などゝ云ふ、それは道が假に人に現れて來たと云ふ意味のことを申します、「權化」と云ふこともそれと同じことで、化は「ばける」と云ふこと、卽ち此　明治天皇は國體の權化である、それを內容的に論じ來る時は、卽ち　陛下の御盛德は國體の自覺より來つたものであると云ふ結論に成つて來る、此「國體の自覺」といふことは、非常に大切なことであつて、これが殊に　明治天皇の偉大なる御性格を示現した原動力で、又日本建國の　皇猷を中外に輝かし、未曾有の德澤光輝を此人生に垂れさせられた土臺であ

つた事は勿論、未來の世界的大解決の一大標準であります。

十　國體の自覺を失へる今の日本

國體の自覺といふことは、ひとり　明治天皇の御盛德を論ずる上に就ての話ばかりではありませぬ、是は日本國の今日に於て、あらゆる思想界、政治經濟等の各事實の方面、或は之をもつと適切に申せば實業である、一般のこの國力、國運を發展すべき所の國の總ての事實及び勢力、皆この國體の自覺と云ふことから現はれて來なければならぬのである、然るに今日は國の政治でも敎育でも或は又文藝美術工藝等、時々刻々に變遷する所の嗜好風俗、總ての事柄が皆國體と云ふことの自覺を缺いて居る、「國體の自覺」を缺いて居ると云ふことは、卽ち日本自からが日本の趣意に背いてゐるといふことに歸着するのです、魂が拔けて居る！　その魂が拔けて居る所へ、學問をして見たり金を拵へて見たり交際をして見たり美しい着物を着て見たりしても、肺病やみが緋緞の鎧を着たやうなものである、辨慶、樊噲のやうな勇者が緋緞の鎧を着てから

に三十五斤の鐵尖棒を振廻して、太く逞ましき馬に打乘つてピカ〳〵光つた武具で軍に出たと云へば、いかさま氣丈夫で、美事でもあるし鎧も效を成さうが、今死ぬか分らぬ肺病やみ、有るか無いか分らぬ皮だけで生きて居るやうな者が、三十五斤の鐵尖棒を背負はされた所が仕方がない、今政府は大變心配をして教育を奬勵したり、風俗の矯正とか、神社の崇敬とか頻りに民風の改善を計つて居るのです、決して怠けて居る譯ではない、隨分骨を折つて居る、通俗教育會のやうなものも拵へて居るし、文藝何とか云ふやうなものも拵へて小説の世話までも燒いてゐる、方々には學校があつてどんどん教育して居る、宗教もそれ〴〵働いてるのでせう、佛教家は比較的活動は鈍いが基督教徒などは盛んにやつてゐる、けれども魂を失つてゐるのである、魂がないのに無闇に種々なものを押込んでも到底要領を得られない、兎に角宗教も學校も殆んど國體と云ふ自覺を喪失して居るから、文明と云へば今日の所では唯西洋の文明である。

十一　名分先づ亂る

西洋の文明も惡いことはない、結構だけれども、西洋の文明には日本の國體と一致する文明と、一致しない文明とがある、日本の國體と一致しないのみならず日本の國體と反對した思想がある、反對しようが一致しまいが、何でも文明は西洋が本家だと考へて、西洋でさへあれば宜い、バタ臭くペンキ臭くありさへすれば文明だと考へて唯無茶苦茶に西洋がつて居る、例へば「日本」と云ふ立派な國の名があるのに、外國と交際するに就ては曲げて「ジャパン」と呼んでゐる、いかにもをかしい、先年或商人が亞米利加の博覽會へ商品を出すのに『大日本何所其所の何の誰』と書いた、さうすると亞米利加の博覽會は之を受附けない、大日本と云ふ國はない、矢張りジャパンのことだらう、「ジャパン」と云ふ國はあるけれども「日本」といふ國はない、日本と云ふ國とは交際しないから出品を受附けることは出來ぬと斷はつた、日本の方の役人も其出品者に向つて、確か東京の商人であつたと思ふが、「ジャパン」と書かぬと通らぬ、日本同志では日本と云つて居るけれども、外國では「ジャパン」と云ふから、『ジャパン東京何所其所何の誰』と斯う書かなければいかぬと、日本の役人が其商人に言

つた、所が此商人は『さうですか、私は日本人であつて、ジャバン人ぢやない、私の國は日本と云ふ國だ、日本と云ふ國の人が日本と書いてそれが通らないならば出品は御免蒙る』と云つてとう〳〵其品物を出さなかつた、其人の名を聞損なつて甚だ殘念だが、日本にも未ださう云ふ氣骨のある人間があるかと思つて愉快である、「日本」と發音して居るものを「ジャバン」とする必要はないから、是はさつさと關係諸國へ改正を申渡したら宜いではないか。

曾て露西亞のことを「魯國」と書いたことがある、是は日本の字を宛てゝ符牒のやうにいふ、丁度「英國」とか「米國」とか云ふやうなものです、日本では英國公使館などゝ云つてゐるけれども向ふでは知りはしない、こつちだけで「英吉利」なり「米利堅」なりの一番上の借音字を取つて「英國」といひ、「米國」と云つたので、元元向ふとこつちとの間に通用した言葉でないから何と言つても構はない、だから露西亞と云ふのを略して借音で「魯」の字を書いて魯國〳〵と云つてゐた、所が其時の露國の公使が此「魯」の字を段々日本の字典で引いて見ると「おろか」といふ字、馬鹿の者を

魯鈍といふ其魯鈍の「魯」の字を書いた、けれども日本ではロシヤ人は馬鹿だからと云つて其「魯」の字を書いたんぢやない、昔から支那にも「魯」の字をば國名に用ひたことがある、孔子様の生れた國が「魯」といふ國だ、地名に慣例のある字だから、ちよつと日本では洒落て、孔子の生れた國の名前のことだから、決して惡い量見で附けたんぢやない、所が魯西亞の公使は「おろか」と云ふ字だと云ふので抗議を持ち込んだ、外務省に向つて「ろ」の字は幾らもあらうに此「魯」の字を使つたのは我國を馬鹿にしたやうで穩でないから、外の字と變へてくれと抗議を申込んで來た、こちらも元々惡い氣で附けた譯でないから、然ば換へて他の罪の無い字に致しませうと云ふので、あの「露」と云ふ字にした、(それだから戰爭の時にとう〳〵日本の日に照らされて露國の露がとけて仕舞つた)、可愛らしい無邪氣な字だからと云ふので「露」といふ字にあらためた、文字は「露」だつて「魯」だつて義を取つたんぢやない、音を取つたんだから構ひさうもないものだが、さて「ろ」の字が幾つもあるのに「おろか」と字を取つたとすれば、露國の人間は見て心持が惡くなる譯だ、そこで自國の體面に

關すると云ふので外務省へポンと一本參つた、外務省も寝耳に水だ、惡い氣で附けたんぢやないが言はれて見れば御尤もだと云ふので早速これを撤回して了つた、是は名稱でも何でもない、タカがこつちの符牒なんだ、然るに日本と發音するものを「おほやまと」とか何とか云ふなら兎も角、今それを「ジャパン」と云ふ、是は慣例上さうだと云ふが『この國は日本と云ふ名前だから「日本」と呼んでお呉んなさい』と言つた所が故障を言ふものがある譯もなからう、それを一向構はずに、蒙然として誤つた習はしに從つてゐるのは不都合である、かう云ふ風に名分と云ふことを構はない今日の習慣になつて仕舞つた、然るに彼の商人が「ニホン」と書いて『私の國はジャパンぢやないからジャパンと書くならいやだ』と云つて出品しなかつたといふのは、少くも日本人らしい日本人であるとおもふ。

十二　三笠か相模か

それから是は小さい話だけれども、日本の字は横に列ぬる時は必ず右から讀む、縱

にする時は上から下へ讀み下す、所が西洋の字は左から書く、西洋の字を書くんなら左からやるのが當然だが、日本の字を書くんなら右からやつたら宜さゝうなもの、それを態々横に左から書いたものがあるが是はなんの爲だ、能くあるです、東京などには幾らもある「理髮店」などもまさかに「店髮理」とは讀まないけれども、左から書いて西洋がつた積りで居る、がつた位ですめば宜いけれども、恐らく是が日本人の自覺を失つて居ると云ふ一つの證據だらうと思ふ、第二事實上間違ひが生じて來る、軍艦に「三笠」と云ふのがあり又「相模」と云ふ軍艦がある、あれを假名で書いてそれを西洋風に考へて左から讀むと三笠が「さかみ」となり、相模が「みかさ」と讀まれて飛んでもない相異になる、若し書きかたに規律が紊れたら、それが爲どんな間違ひが出來るかも知れない、さりとて私は必しも西洋の思想や西洋の風俗をば絶對に拒むと云ふのではない、良いものは用ゐる、文明は西洋の文明と云ふ譯ではないから、良いものは採つて用ひるが宜い、其代りこつちの文明も世界の文明だから向ふへやるが宜い、併しながらそれを採つて用ひる上に於て自國の獨立までも危くするとか、自國の

尊嚴までも傷けると云ふやうなことをして、必ず彼の風俗を眞似んければならぬと云ふ理窟はない、日本が今日まで建國以來二千五百年の現時に至つて、自國の文明を消失して仕舞つて、外國のつぎはぎ文明で變挺なものを拵へて、西洋では二十世紀の文明と申して居る、此二十世紀と云ふことは進歩した時代といふことを意味してゐる、その進歩してゐる時代にあつて日本はどうである、馬鹿々々しく退歩した事が多い。

十三　うそつき病

大體日本人は昔から嘘をつかない人間であつた、餘りに率直過ぎて飾が無さ過ぎて剝出しのやうな國風の人間であつた、それが今日は殆ど嘘を以て固めたやうだ、別に惡くない事でもちよい〳〵下らぬ嘘をつく、商人が物を賣るのに謂れなく不當な嘘僞を言つて物を賣らうとする、買ふ者も、又それが元價の切れると云ふことを腹で承知してゐながら、牽制的に賤く値切らうとすると、値切る奴があるから懸値を言ふと斯ういふけれども、懸値を言ふから値切るのだといふ、賣る人と買ふ人と頭の中にはあ

いつが嘘をつくから、こつちも嘘をつかうと云ふ、互に嘘の機關砲を頭の中に仕掛けて置く、此コツプは幾らだ、是は實は二十錢で仕入れて來て二十五錢位に賣れば結構だけれども、其を五十錢だといふ、五十錢は高い、まかるか、へー少々はお負け申します、それで買ふ方でも大抵こいつは二十錢位のものだらう、二十五錢なら買つても宜いと思つても、之を十五錢に負けろと斯う言ふ、十五錢と五十錢と相距ること遠い、こつちは五十錢と云ふ嘘をつかなければ値切られる、正當防衛なんだから仕方がない、買ふ方も『さうかお前の方で五十錢でなければ賣らないと云ふのなら仕方がないからそれで買はう』と云つて買へば高いものを賣りつけられる、埒らないから、これも正當防衛で十五錢とかういふ、兩方から讓り合つて結局は元の杢阿彌で二十五錢位で相場が出來る、此問答に三時間半かゝる、三時間半かゝると草鞋が七足出來る、馬鹿馬鹿しい話だが、さういふやうな鹽梅になつてゐるんだから、片々だけ正直にしようと云つたつて出來ない、人が嘘をつくんじやない、國が嘘を言ふのだ、『是は元は二十錢で買つて來たんだけれども、あなたは坐つてゐて買ふんだから二十五錢にお買ひ下さ

い』と言へば、それは尤もな話、是が電を立てゝ造れば一つのコップを拵へるにも少くも何十圓と掛る、一つのコップにそんなに掛つては大變だから二十五錢で賣つて貰ひませう、かうなれば磊々落々で心持が好いんだけれども、そんな鹽梅で、人間を見るとこいつは値切る奴だと思ひ、商人と云ふやつは狡いものだと考へて、兩方で正當防衛の連發をやるんだから、畢竟人間が嘘をつくんぢやない、國の風俗が嘘をつくのである。

十四　乘換切符

東京には人間が約二百萬も居るが、此人間は悉く泥棒の宣告を受けて居る、電車へ乘ると「乘換切符」と云ふものを與れる、細長い切符で方々の停留所の名がどつさり書いてあり、こつちに時間がずつと書いてある、『何所其所乘換を與れ』と云ふと、何所から乘換へて何所へ降りると云ふ鋏を入れる、それだけなら未だ宜いが、今度は時間の鋏を入れる、何所へ何時何分に何所から乘つたと云ふことを印する、之をやらな

いと乘換切符を持つて途中で降りて用を足して今度は外から乘つて行く、何所で乘るか分らないから鋏を入れて、もう一つ其切符で又歸つて來るかも知れないから行先に鋏を入れる、それからもう一つ時間の鋏を入れる、是だけの手數をかけないと乘逃げをする、乘逃げ豫防の爲に「乘換切符」と云ふものを與へてちやんと鋏を入れる、是はどうです、東京の人間は此通りにしなければ乘逃げをする人間でせうか、それから東京市民も其「乘換切符」を何とも思はず平氣で『オイ乘換切符をお與れ』とか何とか云つてそれを帽子などに挾んですましてゐる、所の鋏を入れて貰ひ時間の鋏をもお願ひして、私は危險人物なんだから何分宜しくお賴み申します、それぢやア所の嘘をつかないやうに一つ鋏を入れてやらう、もう一つ時間の嘘をつかないやうに鋏を入れてやらう、こんなにされて、二百萬の人間の中一人も鐵道會社なり市の電氣局なりへ向つて抗議を申込んだ者がない、それでは市民を侮辱して相濟まぬからと云つて「乘換切符」なしでやつたらどうなる、まるで乘逃げをする、一枚の切符で電車に三十遍も五十遍も乘るものがある、それだからさう云ふ侮辱を加へられて居る、あの「乘換

切符」は算盤の化物と云ふ名が付いて居るが、算盤のやうな細長い切符です、それに所の鋏、時間の鋏、何時何分まで入れる、如何にもこせついて居る、先づ大國の襟度は偖置て、この東京二百萬の市民が東京市自ら營んでゐる電車の爲に、斯の如き侮辱的宣言を蒙り、さうしてあの侮辱のお札を貰つて悦んで居る、是は實に情ない話だ。

十五　黄金人種

日本は佛教國だと云ひ、或は神國だと云ふ、神國だけでも澤山の所へ、佛教國なら尚更のこと、神様と佛様と兩方で番をしてゐる國が、耶蘇教國の（昔は西洋人をつかまへて獸だと云つて馬鹿にした、毛唐人だと云つて獸を意味した言葉で之を侮辱した其侮辱した）毛唐人にも劣つてゐるではないか、神佛兩方で持つてゐる大した國が、そんなに嘘つきや乘逃げ人種を出すとは情ない、西洋では公園などに果物が澤山生つて居ても一人も之を採るものがないと云ふ、電車や汽車も至極簡單であるといふ、西洋人が日本へ來ると、汽車へ乘るに、切符だとか荷物のチェッキだとか、急行券だとか

幾つも出されるので、日本の旅行は宜いけれども之で不愉快で叶はぬと云ふさうだ、是だけ風俗が違ふと云ふのは研究物だ、それでは西洋の國柄が優れて居つて、それだけ良い人民が出來たのか、日本の國柄が大體が惡くつてさう云ふ風になつたのかと云ふことを考へると、先づ多くの人は、此日本と云ふ國は國柄が劣つてゐると云ふ如くに考へてゐる、『我々劣等人種』がなんどゝ言ふ人がある、日本人の癖にそんなことを云ふ、西洋人は色が白いから優等人種だと云ふ、是は西洋人自からは人間の上等なのは色の白いもので、何の色でも色の着いてゐる人間は下等人種であると云ふ迷信を持つて居る、是は西洋人の一つの病ですな、自から「白皙人種」と稱して色の白い人種は、あらゆる人種中一番上等な人種で、之に亞ぐのが黄いので、あとは銅色に、それから黒、黒なんと云ふのは下等なんだから奴隷に使へば宜い、種々の壓迫を加へて人間に階級を付けてゐる、日本人などは西洋人の眼から見ると黄い、是は白と黒の合の子だ、どう考へても未だ白には及ばないが、黒ほど下等ではない等と失禮にも品評をして、それで之を「黄色人種」と名けてゐる、所が日本人自から西洋の感化を受け、

西洋の思想を良いものと考へて、『吾々有色人種』がとか『吾々劣等人種』とか云ふ、色が白くないと背の低いのを以て劣等としてゐる、是は諸君どうです、あなた方は之に甘じますか、諸君は矢張り黄い！　故に黄い方の人間は劣つたものと考へます乎、私は之に就ては大いに異議がある、全體私の本當の議論は、どつちも上下なし、白くつても黄くても黒くつても、それは天が附與した自然の色で、それが所謂彩りなんだからどつちでも宜い、平等です、けれども向ふがさう云ふ風に申せば、こちらも賣言葉に買言葉で、彼は「白い」のを勝れると云へば、こちらは「黄い」ことを以て優るものとする、金屬の中で白で一番貴いのは「銀」である、黄いので貴いのは「金」であります、賤しい方で申せば白いのは「鉛」に「ブリキ」です、黄い方は潰しに踏んでも「眞鍮」です、諸君眞鍮の金盥とブリキの金盥とどちらが宜い、まア斯うも言ひたくなる、そこで私は日本人の種族をば曾て「黄金人種」と云ふ名を附けた、けれどもそれは黄くても白くても宜い、私の方から云ふとどつちでも構はない、人の文野は色に關係はない。

十六　優等人種の身尺

又人間の大きい小さいと云ふことも爾うである、大きいから優れてゐると云ふ事はない、此點に於ては用などをさしても小股のキリ〳〵と利くやつは小さいのに限る、大きな奴はノタ〳〵して、相撲等は大きい方が宜いが、郵便の配達に大きいのは適かない、又兵隊は大きいのは適かぬ、是は今日の制度で以て兵隊は何尺何寸以上とかなつてゐるけれども私は反對だ、兵隊は小さい方が宜い、なぜかと云ふと擊つ鐵砲の方は四尺でも五尺でも同じだが、擊たれる方は面積が少なければ那爲たつて中りが少い、ノツリとした大男を兵隊にすれば一寸でも二寸でも大きければそれだけ彈が餘計中る、彈が中れば負けるにきまつて居るから是はいけない、擊つ方は大きくつたつて小さくつたつて同じことで、擊たれる方になると一寸でも大きければ大きいだけ『中る面積』を多分に持つてゐる、こちらへ中らないやうにして向ふだけへ中てるやうにするが宜い、それには日本人は短軀輕捷といふ良い株を持つてゐる、それを態々引伸ばす

のは愚な話である、小さくして體に實が充るやうに育てゝ貰ひたい、唯ノッ〳〵と大きくしたノッポを造る必要はない、秀吉は短軀であつたが匹夫から出て天下を取つた、人間に『實がいつて』居なくてはいかぬ、頭がしつかりして居なくてはいかない、筋骨が逞ましく生氣が活躍して居なければいかぬ、小さくても小手のきくのが日本人種の特徴である、顔の色や身の丈までも西洋がることを恥とせぬに至つたのは、よくよく自國の精神を失つたものである、文字の書き方から身形風俗までも西洋に屈伏するとは、いかにも情けない非名分の振舞である、けれども國風民俗の上において、斯くウソをつき乘逃げをするものが多いと云ふことは、たしかに西洋に劣つてゐるのである、それは何の故であらう、日本人は固有の劣等性格なのであらうか、將又中途からの客性によるのであらうか、……中途からである！　中途からである!!　日本の固有性格は嘘をつかない人種である、それが斯くも嘘をつき乘逃げをするやうになつたのは、固有性を忘れたからである、即ち國體の自覺を喪つたから來つたのである。

十七　清潔人種

日本國固有の民俗は、嘘をつかない、もつとも清潔な素直の性格であつた、神代以來天性の生しのまにまに素朴質直にして、毫も粉飾葛藤のない民性であつたのが、中古だん〳〵と佛教や儒教のために民性を動搖されたのである、近來に至つては、西洋の惡思想、ことに基督教の惡感化が、隨分と吾固有民性を傷害してゐるのは、眼前の事實である。

清潔を理想とした民俗は、たしかに神聖種族たるの證據である、抑も教の極古いといふ傳へは、「七佛通誡偈」としてある、日本の最古代にも古佛の遺法が傳來して居つたに違ひないことは、神武建國の規模でわかる、一體道德の根源とは清いといふことにある、釋迦如來が佛法を說かぬ前から『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎』と云つて『諸の惡は作す莫れ、衆の善は勤め行へ、自から其意を淨くせよ、是れ諸佛の敎なり』とある、斯う云ふ僅かな偈だけれども、心を淨くすると云ふことが道德の

根源になつて居る、佛法では清いと云ふことの基礎の上に、諸の理想も感情も意志も皆之に準用して、道德の地盤を据ゑることをば奬勵せられて居る、であるから佛の表徵に蓮華がある、蓮華へ乘つて居るとか或は蓮華を持つて居る、妙法蓮華經の蓮華と云ふことは淨いと云ふことを例へてある、蓮華ばかりは何物を以て淨くしなくても、自體汚い泥の中から出て來てゐながら淨い、他の汚いものにけがされない、華でも葉でもどんなものにも必ず汚ない物に染まない、玉にしてころ〳〵と落して仕舞ふ、非常に淨い、さういふ汚れを受けないやうな正當防衛法をちやんと性來に持つた淨いものだと云ふので、佛は蓮華をば道德の表象として居る、佛樣が蓮華へ乘つてゐると云ふけれども、何も佛樣が乘るやうな大きな蓮華があるかも知れぬけれども、それにした所が動物の原則として植物の上に坐るなどゝ云ふことは蟲か何かでなければ出來はしない、一丈六尺もあるやうな佛樣が蓮華の上に坐りやうがない、併し見慣れたせいか誠に格好がいゝです、椅子に腰をかけて居る佛樣も面白くないし、飛行機へ乘つた佛樣もいけない、蓮華を理想とすると云ふことは永い間の習慣である、それは何であ

るかと云ふと清淨を意味する、日本の道德思想及び民風も、淨いと云ふ事から根源してゐる、日本の神代歷史に依れば、伊弉那岐尊が　伊弉那美尊に會ひに、夜見の國へお出でになつた、夜見の國へ行つて體が汚れたと云ふので、阿波岐原に於て、禊を遊ばして體をお淨めになつた、其體を淨めたと云ふ時に國土經營の諸の神樣が出來て、其中心となつたのが　天照大神だから、淨いと云ふことを理想として神樣が出來た、其仕來りが段々國民の風俗となつてやゝともすると直に體を洗ふ。

日本では非常に不潔を嫌ふ、尾籠な話をするやうですけれども婦人の月經などを日本の神樣は忌むと云ふ、日蓮聖人のお弟子に婦人の信者があつた、其方が月經の時に愼しむと云ふ神樣の敎があるが、佛法では如何でござるか、月經の時に法華經を讀誦しては惡いか宜いかと云ふお尋ねをした、其時に日蓮聖人は何と答へたか、佛敎にはさう云ふ沙汰はない、日蓮あら〳〵一代藏經を拜見したが婦人の月經を忌むと云ふことは別に書いてない、書いてはないが併し「隨方毘尼」と申して、其國々の法律規則に隨つて或部分までは佛法の仕來りに違つても其國の法律を守れ、斯う云ふことを釋

尊が教へられた、經文には婦人の月經を忌むと云ふことはないけれども、日本の仕來りで之を忌むと云ふことで、神は嫌はせ給ふことの傳へになつてゐるから、それ等を斟酌して、佛道の事をするのにも仰々しき儀式だつた事は止めて、心に能く信仰を練つて、妙法蓮華經とお唱へあつたら宜からうと云ふことを答へられた「月水鈔」と云ふ御書がある、之に依ると、月經を忌むと云ふことは佛法にはないけれども、日本の國風がさう云ふ清潔を貴む國風だから、それに隨へと云ふ斷案を下された、斯くの如く清潔を貴ぶと云ふ國は何所にも無い、この清いと云ふことを以て道德の基礎とせられたと云ふことは、卽ち古聖人の道を傳へたもので、日本人は無闇に體を洗ふ、洗はぬと心持が惡い、日に二度も三度も湯に這入る人がある、度々這入るには窮屈な着物だと面倒だから、直に裸體になれる樣な着物を好む、西洋人は湯に這入らないで着物へ垢を着けてさうして着物を洗濯する、てもなく丁度なすり付けるやうな形、日本人にはそれは出來ない剝出しの體を持つて行つてゴシ〳〵洗はなければ氣が濟まない、垢摺をかけて輕石で洗ふ、女などは鶯の糞まで用ひる、默つて打遣つて置けばトクサ

もかけかねない、其位に洗ふと云ふことは自然清潔を好むと云ふ民風が今日の風俗を成して居る清潔人種で、世界各國何れの國でも日本人位清潔に重きを置く國はない、是は神樣からの仕來りで、宮中などでは腰から下へ手が觸れることがあると、『次ぎに『なつた』と稱して必ず其手を洗ふ、是は着物で覆はれて居るから宜ささうなものだが洗はなければ何も出來ぬ、其通り日々やつてゐる、さういふ潔癖に過ぎるやうな清潔思想があると云ふのは、古へよりさう云ふ清潔を以て德の基とした遺風である。

十八　時代化せる變性

斯の如くごく古い聖人の教と云ふものが此國にちやんと現存して居る、それを傳へて來た古い御家柄であるから、古い道德思想と云ふものが我國道德の中心になつてゐる、それから汚いものを綺麗にする、是は變化の上から之を横に見て、形あるものを横に見て、整理する上から申せば物を整へることである、物を整へると云ふのは卽ち物の中心を定めるので、物の中心を定めること、汚い物を綺麗にすること、上下の分

を正すこと、斯ういふやうな思想は是は正直と云ふことからでなければならぬ、體を綺麗にする位正直なことはない體を綺麗にする通り心を綺麗にする、例へば斯う云ふ話がある、借金が氣になつてならない、それを返して仕舞ふと誠にさば〳〵として好い心持だ、丁度垢を背負つて心持が悪い、之を洗つたら誠に好い心持だ、斯う云ふのと同じ意味で、體質の上から汚れを去つても、心靈の上からさう云ふ厄介を拂つても同じく好い心持になる、責任を果していゝ心持になつたと斯う云ふ、さうして見れば無いことを有ると云ひ、有ることを無いと云ふ嘘をつく位心持の悪いことはない筈だ、それを今言ふ通り殆ど嘘をつくのは人間の權利であるかの如くに考へ、商人は懸引をする、買ふものは値切つて平氣でゐる、打遣つて置けば電車の話ではないけれども乘逃げ勝手次第、東京市民二百萬は悉く薩摩守に任官の宣告を受けて、そこで乘換場所に鋏を入れ、時間の鋏を入れる、斯う云ふ手數をかけなければ乘逃げをする、まざ〳〵とお前は嘘つきだと云ふ刻印をパチ〳〵と鋏で入れられる、彼の「算盤の化物」は『お前は嘘つきであると云ふ宣告書』である、嘘をつかない筈の人間がこんなに嘘をつく

やうになつたのは是はどういふ譯かと深く〳〵考へねばならぬ、是は吾々でも諸君でも、實に國家としても國民としても、吾々の頭にかゝつた大問題である。

十九　誤れる宗教の惡感化

斯くもウソをつく人間の多い國となり、斯の如く墮落の國となつてゐると云ふことは、全く此國の性が悪かつたのだらうか、性が善いのに斯く變悪したんだらうか、支那人も能く嘘をつき朝鮮人も嘘をつくさうです、けれども是等の嘘をつくのは未だ無理はない、佛教がそれだけ開けて居らぬ、開けて居つてもそれは昔のことで、今日は悪い政治の爲に變挺になつて、思想の文明もなければ法律の文明もなければ政治の文明もない民であるから仕方がない、けれども日本の如き國體は立派だし國の傳來は立派、國民性は立派だし歴史も立派だ、さうして諸の學問もあれば宗教もある、宗教などは問屋のやうなものだ、西洋へ行けば佛教と云つてもこんな大きな佛教はない、日本へ來ると何でもある、儒教もあれば佛教もあれば神道もあれば耶蘇もある、マア世

界各國の中で宗教が一番出揃つてゐるのは日本で、色々な種類がある、宗教の博覽會とも云ふべきほどの事、從つてお寺もどつさりある、京都あたりへ行かうものなら、お寺の中に時々民家がある位、そんなにお寺がどつさりあつて其お寺には貴い佛樣があり、貴い坊さんが貴いお經を讀んで說敎だの演說だのとそれ〴〵人を敎へて居る、京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三體あつて是が皆觀音樣だ、其御手が平均五百本と見ても大した數、その觀音樣が皆大慈大悲の御手を垂れて國民を愛護したまふのである、然るに人民は偖置いて其三萬三千三百三十三體の觀音樣を守護する所の坊さんが、觀音をだしに使つて飯を食つて居る、憐れなるかな勿體らしく『抑當山の本尊は忝くも國寶にして……』などとすましてゐる（なぜ情なくも國寶にしてといはないだらう）國寶として拵へたんぢやない、人が拜む爲に拵へたんだ、拜む爲に拵へた本尊樣をば信仰の的としないで彫刻が良いからと云ふので國寶にされたことを誇りとする、それではお猿さんを彫つても觀音樣を彫つても同じ譯だ、運慶が彫つた觀音だから貴いと云ふのなら猿の根付でも同じ事だ、觀音では根付にはならないから寧ろ

猿の方が値が高いかも知れない、斯う云ふ風に、僅に彫り手の技倆に依て持續される樣な姿で有つて、眞の感化が及ばない、古は及んだらうけれども今日は及ばない、往昔及んだ時分の觀音樣の感化はどうである、今日及ばなくなつて三錢か五錢か取つて三萬三千三百三十三體の觀音樣を見世物にして居る時はどうである、どつちが日本人に利益があるだらう、寧ろ今日の方が無邪氣だ、昔の觀音樣は觀音樣から日本人に與へた害が幾らもある、觀音に罪はないけれども觀音によつて害をなしてゐることが幾らもある、阿彌陀樣でもお釋迦樣でも同じことだ、阿彌陀や釋迦に罪はないけれども間違へて敎へてゐるから人間が惡くなる、法華經でも同じこと、間違へて敎へればそれは必ず害になる。

二十　徵兵除の御祈禱

日蓮主義でもそれを鼓吹する人が間違へれば、その誤られた日蓮主義に依て害をなす、或在所でドンドコ太鼓を叩いてお祖師樣を祀つて御祈禱をしてゐるから、何をし

て居るのかといつて聞くと　背戸の杢兵衛の悴が兵隊に出さうだから、兵隊に出ないやうに拜むのだと云ふ「徵兵除」の御祈禱をして居る、日蓮聖人は國家と云ふものは國民が寄つて守らんければならぬものだと說いて立正安國と云つた、正を立つて國を安んずる……其日蓮聖人を拜むところの人がお祭りのやうな騷ぎをして、國を治める爲の南無妙法蓮華經が、豈計らんや「兵隊除」の御祈禱ハ之には日蓮聖人もお驚きになつたらう、そんな鹽梅にやつて居れば、日蓮宗が手傳つて非國民を作つてゐるのでそれが若し何かの拍子で兵隊にでも出なかつた日には『お祖師樣の御利益で徵兵を遁れた』と言ふのであらう、宜い面の皮なのはお祖師樣だ、とう〳〵徵兵を忌避する所の非國民を造る宗旨「法華亡國」と言はれても已むを得ない、國賊の親方になつて仕舞はなければならぬ、それが東京某所などには「厄除のお祖師樣」なんと云ふのがある、是は人間が厄年に當ると其厄を除けて下さると斯ういふ、それから頭痛の時にお祖師樣の頭へ焙烙を冠せて灸をするといふのがある、さう云ふお祖師樣がある、頭痛のお祖師樣に、疝氣のお祖師樣、厄除のお祖師樣、さては徵兵除のお祖師樣、色々なのが

ある、無盡の當るお祖師樣もある、お祖師樣たるものも斯の如く間違ひられては實にどうも……幾らお釋迦樣が貴くても、法華經が有難くても其本意を失へば此通り……。

二十一　誤謬を正すは救の第一なり

『世間の罪によつて惡道に落る者は爪の上の土の如く佛法の過に依て惡道に落る者は大地微塵の如し』と日蓮聖人はお歎きになつた、親殺しをしたり火つけをしたりさう云ふ樣な罪で惡道に落る者は爪の上の土ぐらゐしか無い、佛法の習ひ損ひに依て惡道に落る者は大地微塵の如く多い、是は大事件、それであるから日蓮聖人は血眼になつて佛法の誤りを正さんければならないと說かれた、人の心の本になつて行く所の柱に誤りがあれば其國は大變だ、機關車の後へ汽車が附て行くやうなものだ、機關車が新橋の方へ向つて行くのに汽車が神戸の方へ行かうたつてそれは出來ない、敎も其通り根本を誤れば其敎に依て却つて皆害されて仕舞ふ、今日の場合では何宗も彼宗もない、ない證據と云ふものは佛樣がお寺にあつても、其佛樣の感化がどう及んでゐるか

と云ふ事は確證が出來ない、若し確證が出來るといふならば、佛教が渡つて千有餘年もと〳〵嘘をつかない人間であつたんだから其上にも正直になつて行かなければならぬ、然るに民性は逆行してゐる、それが近來は尙ほ甚しくなつた、昔は金を借りるにも借りた金を返さなかつたら、大勢の中で笑つて呉れろと云ふやうなことを言つて金を借りた、『若し期日に於て返濟致さゞる時は大勢の中に於て御笑ひ下さるべく候』と云ふやうなことを書いた、此頃の人にそんな證文で金を貸した日には確實に返す奴はない、期日になると債務者の方から出掛けて行つて『今日は期日でございますからどうぞお晒ひ下さい』といふやうな鹽梅、斯く日本の國民性と云ふものを害したのは、佛教や儒教のやり損ひどもが害したのである、諸君！　米は體を養ふ上に於て大切なものだ、けれどもごろはち茶碗に十杯づゝも食べたら必ず胃を害するだらう、幾ら良い物だつて其調合を誤ればいけない、況して教と云ふものゝ中には色々ある、療治でいふと局所療法がある、念佛の如き禪宗の如き是等は皆一時の變性を治める爲に出來た宗教である、餘り人が理窟に凝つてゐる時、理窟で要領を得ない時分には、人生の

問題を早く解決しようと云ふ爲に念佛の如きものが出る、餘り人が沈滯して要領を得ない時分には、自我心を認めることの必要を感じたと云ふやうな場合に禪宗が出る、是等は皆或時には藥であつた、相當の效はあつたけれども、それはモルヒネを以て人の病を治すやうなもので、どうもあの藥はよいからとて今度はモルヒネを御飯の代りに食つたらどうだ、さういふ譯には行かない、一時の變勢に依て、其變勢を救ふ爲に必要なのだ、對機說法應病與藥の教は必ず其場合に限つて居る、いつ迄も固守すべきものではない。

二十二　常の食餌

いつでも差支へないものは、卽ち萬世を貫いて人間の土臺となり、諸の理性の根源となる所のものである、是は千載萬世を貫いて動かすことの出來ないものである、其動かす事の出來ない大眞理と云ふものをば吾々は求めるのである、丁度吾々が牛乳に依て營養を取り、米の飯に依て養ひを受けるとか云ふやうなもので、風を感いた時に

はアンチピリンのやうなものを服む、それは風を感いた場合だけなのだ、風をひかないのにアンチピリンを服む必要はない、脚氣の藥は足がどうかなつた時に服む、頭痛の藥は頭がどうかなつた時に服む、頭も足もどうもならぬのにそんな藥は要らない、けれどもどうなつてもならぬでも食はずには居らない、死なない用心に何物かを食べなければならぬ、唯食ひさへすれば何でも宜いと云つて土の團子を食ふ譯にはいかない、一番養ひになる良い物をば食ふ、凡そ食物中一番優等なものを選んで吾々は常食とする、日本人は米ときまつて居る、西洋人は牛肉などを常食として居る、そこで肉食が宜いか穀食が宜いかと云ふことは、專門家の間でも屢々議論があるやうであります、吾々共は專門家でないからどつちがどうだか分らないが、日本人は昔から米を食つてゐる、米の良く出來る國で「豐葦原の瑞穗の國」と云つて米が性に合つてゐる、又釋迦如來は米を煮て食べると云ふことに就て屢々功德を說いてゐる。

二十三　教へ損ひと習ひ損ひ

要するに牛肉なり牛乳なり米なりと云ふやうな柔かくて養ひになると云ふ溫和な所謂中性の食物を選ばんければならぬ、偏性なものをふだん食ふことは出來ない、唯一時のぼせたとか、熱が出たとか云ふのを治す爲には、偏つた物を用ひる、それは國家に變亂が起つた時に戰爭をすると同じだ、戰爭をして天下を取つたからと云つて、年中戰爭を以て世を治めるといふことは出來ない、昔支那の賢人が、漢の高祖にその學問を用ひないことを諫める言葉の中に、『陛下は馬上に於て天下を取つたから學問は要らぬと仰しやるが、然らば馬上に於て天下を治め得るか』と言つた、それで一言もなく學問を奬勵したことがある、變に處する場合には劍戟を持たなければならぬ、弓鐵砲も持たんければならぬが、それを常に擔ぎ出されては大變である、藥も其通りだ、毒藥でも何でも或場合には入用だけれども、ふだん用ふべきものではない、此日本が、儒教でも或は佛教でも今日まで此日本の國民性を養つて來たと云ふが、其は違つてゐる、單に佛教のお蔭で五重の塔が出來たとか、美術がどうとか云ふことを以て奇特の中に數へてゐることは誠に恥づべきことだ、それは佛教のお蔭もある、けれども佛教

と云ふものは橋をかけたり、道を開いたり、井戸を掘つたり、溫泉を掘つたりするのが商賣じやない、それは附錄だ、號外だ、佛教は卽ち人心を開發して人の性情の中にある一つの力を認めるのが本職だ、所が佛教が這入らない前、儒教の這入らない前の日本人は、誠に公明正大嘘をつかない人間であつたのが、佛教が這入り儒教が這入つてから、大變嘘つきになつた、是は佛教のせいだらうか、何のせいだらう、嘘を教へたんでないとしても、苟くも宗教たる以上は少くも嘘をつかぬやうに教訓が出來さうなものではないか。

斯の如く論じ來つたならば、此世界中で一番宗教の數の多いと云ふ日本が、其多くの宗教からは何等の良き感化を受けないで、依然として嘘をつくものが多い、電車へ乘つても「懷中物御用心」と云ふ、それはその中に物を取る者が居るから用心しろと斯う云ふのです、けれども電車などへヒョッと誰かゞ乘つて來る、車掌は無意識に「懷中物御用心」と斯う云ふ、其所に恰も乘つて來たものは、俺が乘つたら「懷中物御用心」と言つた、乃公を泥棒と言つたに違ひない、數へて見れば三十人か五十人の中で

す、其中で誰か物を取る奴が居ると云ふ宣告を受けたやうなもの、ちよつと車掌さん、懷中物御用心と言つたが誰を用心するんだイ』と云つて聞く人もない、爾う言はれるとみんなキョロ〳〵して懷ろを押へる、所が豈計らんや懷を押へる先生も矢張り用心される方の人に數へられて居ながら之を怪しく思はない、蕎麥屋へ行つても懷中物御用心、電車へ乘つても懷中物御用心、芝居へ行つても懷中物御用心、寄席へ行つても懷中物御用心、而も時計や煙草入の繪が書いてあつてそこへ「御用心」と文字が加へてある、日本と云ふ國は何所へ行つても泥棒が多い國だ、一人〳〵を分けて考へて見ると、誰が嘘をつき誰が泥棒をすると云ふ人種もない、勿論嘘をつくのを商賣にして物を取つて歩く少數者はある、是も其者が生れたてから取るんぢやない、惡習慣の爲にさう云ふ風になつた、何かの教へが惡いためである。

二十四　感化無能

お寺の屋根が漏るからと云ふので檀家へ一軒殘らず帳面を廻すが、其檀家の中に親

の頭を打つて懲役になつたと云ふものがあつても、和尚さん一向構はない、馬鹿な奴だと云つて知らぬ顔をして居る、自分の檀家で自分の寺の家根替の時に寄進を取りに行くならば、是等の人に對し、佛法とまでは行かずとも、先づ人間の道だけなりとも教へて置かなければならぬ、それを教へないのは、お寺が惡いよりも、坊さんが惡いよりも、世の中が惡くして仕舞つた、世の中が不得要領になつて、何の爲に佛像やお經があつて、何の爲に坊さんがゐるか、坊さん自からも知らない、死んだ時分に拜んで貰ふ爲だと云ふならば、何もそんなに大きな家を拵へて本山の布教の何宗大學のと云つて居るが、そんな大學も何も要らぬ、死人に向つてお經を讀んで『今や汝に悟道の要句を授けん』ぐらゐなら、塔婆を書くことゝお經を讀むことを知つて居れば宜い、お經などは蓄音器へでも吹込んで置いた方が便利だ、それが中學だの大學だのと云つて三年も五年もブックせゝりをして、其揚句が死人に向つて、『今や汝に！』でもあるまい、畢竟生きた人間を教化する爲に大金を使つて學問をするんだらう、所が檀家に親の頭を擲る奴があつても、我不關焉とすまして居る、親の頭を擲つたつてそんな事

はお寺へ來ないで警察へ行きなさいなどゝ言ふ、警察へ行く前がお寺だ、頭を擲つて仕舞つては警察の手を經るやうになるが、其頭を擲るやうになるかならないかは學校の先生かお寺の方の管轄だらう、分擔的にならば半々で宜いから、學校の教師とお寺の坊さんとで聯合で以て教化して居らねばならぬけれども、そんな事はちつともしない、本堂の屋根が漏れば相違なく金を集めに行くが、檀家が親不孝しても打遣つて置く、打遣つて置ても構はぬやうにして仕舞つた、是は今更坊さんが不精で行かない譯でもない、行くやうに教へて置けば坊さんだつて行く、行かんでも宜いことに世の中がして仕舞つた、檀家の人も今度の和尚さんは能くお寺を掃除してお經を讀む、朝早くからお經を讀むと見えて鐘の音が聞えると云ふが、豈計らんや寢て居てカーンとやるのも中にはある、『どうも今度の和尚さんは如才ない、檀家が行つても如何にも腰が低い』とこんなことを言ふ、とんでもない間違ひだ、人を教化する菩提寺の和尚が腰が低いから宜いとは何事だ。

二十五　死生顚倒

葬の時には和尚さんを聘ぶけれども、婚禮の時には和尚さんを聘ばない、佛法と云ふものは死んだ時にばかり要るものではない、死人に引導を渡すことなどは實はどうでも宜い、死んだ時には神主へ賴んだつて宜い、婚禮をする時の引導こそ大切だ、お前方は是から愈々世に立つのだが、どういふ量見を以て世に立ちなさる、女房を持つ何の爲に女房を持ちなさる、何？　子を拵へる爲に持つ、何の爲に子を拵へなさる、其安心が立たなければ結婚しても何にもならぬ、人も家も結婚に依て一代の力を生ずるのである、釋迦如來の佛法は是が爲に世に立つて居るので、此結婚の晩こそ菩提寺の和尚さんの檜舞臺だ、『どうか吾々も今日の目出たい結婚に依て、佛法の心を以て世を渡り、佛法の心を以て身を修め、さうして稼業を勵んで立派な國民となりませう』と斯う云ふ風に誓ひを立てゝ、さうして力ある光明ある人間なり家庭なりを作ると云ふことが佛法の職務だ、諸君は婚禮に坊さんを聘びます乎、聘ばないでせう、聘ばれ

ない坊さんも坊さんだが、聘ばない檀家も檀家だ、それぢや私はお寺の坊さんは聘ばないが學校の先生を聘んで心得方を聞くと云ふなら未だしも、婚禮と云へば媒妁人が這入つて嫁と婿で盃の遣り取りをして、高砂やと謠つて、それからあとは金屏風と杯盤狼藉で終ひ、是れ結婚の第一條件を忘れて居るのである、汽車に乘るに切符を忘れたやうなものだ、さうして子を拵へるから碌でもない子が多く出來る、かくて死んだらお寺へ駈付けて行つて、有つても無くても宜い引導などを有難がつて居る、未來が大事だなんて！　未來が何だ？　此世の中でさへ碌素法役に立たぬ奴が、未來に地獄へ落ちやうと、豚にならうと勝手にするがいゝ。

二十六　生ける好實例

死人に向つてお經をジャブ〳〵讀んで、譯の分らぬ引導だとか何とか云ふ理窟を言つて聞かせる、死んで仕舞つた者に理窟が入るものか、證文の出し遲れよりもつとひどい、さうしてもう死掛つた時分に、お前も大分年を老つたからそろ〳〵信心でも始

めたら宜からうと斯う云ふことを言ふ、お前も年を取つたから信心を止して碁でも打つたら宜からうといふなら開えて居る、人は若い中こそ信心が大切である、論より證據、生證文だ、この本化行學會といふ會で演說會を開いた、大分若い會員が居る、どういふ人達だか知らないけれども多くは青年だ、當り前から言へば何か酒でも飲むとか遊びあるくと云ふやうな時代の人間それが先へ立つて演說會を開いて、何だかみんなして入費を出して演說會を開き、本をみんなにやつたり、ビラなどを書いて、若い紳士達が方々貼つて歩いて、頭の禿げたお爺さんは引張られて此所に聞きに來た、かうならなくてはいかぬ、是が本當の理想の佛教である、若い者の方は先に立つて世の中に活動する中心なんだから、之に佛教の光明が宿つてなかつたら、人も世も枯れて仕舞ふ、人間勝手の心でやつたら仕方がない、妄念妄想の心を定規としてやつたら何所まで狂つて行くか分らぬ、そこで强大なる教と云ふものがあつて人間を導く、其强い教に導かれて行つて、否應なしに正しいものになるやうに道を求め道を磨く、それが行學、行學の二字は日蓮聖人の『行學絶えなば佛法はあるべからず』の金言を取つ

たのである、行は修行、學は學問、佛法を學んでそれを行ふ、今あなた方が一時間でも二時間でも聽いて居る、是は學ぶ、吾々が話して居るのは教へてゐるやうなものだけれども實は上佛祖に對しては學んで居るのである、稽古して居る、試驗を受けて居るやうなものだ、扨之を學んだだけではいかない、私が此演壇に立つて、大いに日蓮主義の講演をする、演壇から降りて非日蓮的の行爲をしたら何にもならない、喋舌つただけのことは體にも行はなければならぬ、口で國體を擁護すると言つたら、身でも國體を擁護しなければならぬ。

二十七　佛性の善感

諸君もさうだ、此演說を二時間でも三時間でも寄席へ行く代りだからと云つて、聽いて居る人もあるかも知れぬ、それはあつても構はぬ、來る迄は何でも構はぬ、何だか東京から講演する人が來る、どんなことを言ふか一つ聽いて見やう、どんな面をして居るか見てやらうでも、來るまでは何でも構はぬ、無禮講だ、其代り此所へ來て一

時間でも二時間でも聽いたら生涯それが五臟六腑に染み渡つて、必ず業をする、それはあなた方の心の奥底に或物がある、あなた方自から知らないでゐても或物がある、是は佛法では釋迦如來でも阿彌陀如來でも大日如來でもあらゆる佛樣と同じ性質のものを一つづゝ持つて居る、それを段々に育てゝ行けば佛にも聖人にもなる、卽ちそれは「佛性」と云ふものだ、其佛性に私の講演が諸君の耳を經て五臟六腑を透して貫徹する、幾ら拒んでも仕方がない、電氣が感ずる、それから「佛性」の隣にもう一つ此佛性と相竝んで其反對のものがある、之を「無明」と云ふ、無明は『明かなることなし』だから暗いといふことだ、之を「迷ひ」又は「煩惱」と云ふ、煩惱の根元の「無明」といふものが其奥底にある、それにも衝る、どつちに强く當るか、佛性に早く感受する者は佛性が段々育ち、成程あの講師の言ふ所は尤もだ『あの通りだ』『さうなければならぬ』と斯う考へる、さう考へられた以上は必ずそれが家へ歸つたらば、段々其心になつて、自然と自分もさう云ふ心を持ち、人にもさういふ心を持たせたいと云ふ考を、諸君が否でも應でも起さんければならぬ、是が「行」と云ふものになる。

二十八　出直し

それから不運にして佛性の方に無線電信が感じないで、無明の方にばかり感ずる人がある、是は講演を聽いても『あんな事を言やアがつて面白くもない』と思ふ、藥瞑眩せずんば其病癒えずとあるから、それでも宜しい、早晩其人は其病が脫ける時が來る、どつちにか中らずには居ない、喋つて居る間は、聽いてゐる間は「學問」、それを心に入れて考へて行ふ時は「行」となる、『行學の二道を勵ませ給へ行學絕えなば佛法はあるべからず』、行と云ふのは實行です、そこで此行學の二道を勵むと云ふ爲に、若い人達が率先してやつて居る、卽ち佛敎の感化が及んだ證據だ、『年を老つたからそろそろ信心をしたら宜からう、今の若さに信心などは氣が利かないぢやないか』斯う云ふやうなことを言つて、惡い方に誘惑しようと云ふやうな者が幾らもある、若い者には佛法が要るのだ、年寄はどうでも可い、死んで仕舞つてからは尙どうでも構はぬ、唯人間だから禮を以て葬らんければならぬ、犬猫のやうにする譯には行かない、人間を

葬るの禮を以てするだけのことで宜いのだ、神主のやうな人が出て來て埋めても構はない、郡役所から出て來て役人が立會つて埋めても構はぬ、警察官の立會でも可い、恭しくお辭儀をすれば宜しい、死人に向つて爾時世尊なんて幾らお經を讀んだつて聞えやアせぬ、魂が聞くと云ふが其は別問題だ、生きて居る中に早く聽かした方が宜い、死んで仕舞つてからの名を「戒名」と云ふが「戒名」と云ふのは『戒を受けた名』と云ふことで、教を受けて其人の弟子になつた印しにやる其名が戒名、死名ではない死んで了つたものに「戒名」と云ふことはない、斯う違つて居る、斯の如く違つて來れば其感化なるものは少しも價値が無い、是は遣り直しです、總て出直さなくてはいけませぬ、日蓮聖人の金言の通り、日本現在の弘まつて居る佛法は、今日まで日本の國民を十分に感化し得なかつたのみならず、國民性を害してゐる、斯の如き雜亂混淆の世の中にしたといふことは何であるかと云ふと、紛れもなく國體の自覺を失つたからである。

二十九　世界文明の消化

國體の自覺とは何ぞや、日本國は道を以て世界を統一して世の中を率ゆると云ふ先進の道の國である、此國の民は道の把持者たる天職を持つて居ながら、道を忘れてさうして却つて救はれる方の相手の人間より劣るやうになつて、先生の方が生徒より劣つて居ると云ふやうな馬鹿々々しい事であつたならば、實に冠履顚倒の甚しいものと言はねばならぬ、西洋人は文明國だと云つて日本へ色々なことを教へた、機械工藝等の有形の文明は確に西洋が先進である、西洋の文明を輸入して來て、日本は大いに國力を發展した、それは爭へぬ、然れども『日本の國體』は西洋から教はつたのではない、電氣だとか鐵道だとか軍艦だとか鐵砲だとかいふやうなものは是は西洋から來た、西洋ばかりじやない、昔時は支那からも色々な文明が來た、朝鮮からも昔は文明が來た、日本と云ふ國は自國に於て何等文明を作り出さずに皆外國の文明を吸收して日本の文明とした、日本の文明といふのはさう云ふ文明ではない、日本の文明と云ふ

のは、あらゆる世界の文明を吸收してそれを整へる文明だ、それが人生の「力」である、日本の國體は丁度胃の腑のやうなものである、色々な物を食べてさうしてこなして之を血にする、こなす所の消化液と云ふものが胃の腑の中にある、それがあるから人蔘でも牛蒡でも豚でも牛でも食べるとこなれて血になる、日本の文明は文明の消化液である、消化液其ものは養ひにはならない、他の物を消化して始めて榮養を得る、人參牛蒡は畑から取つて來る、魚類は海から捕つて來る、鰯でも鯨でも何でも構はない、或は野獸を捕つて來る、あらゆる食物を取つて來てこなして皆血にして仕舞ふ、血にして仕舞へば人蔘でもなければ牛蒡でもない牛でもない吾身の血なり肉なりである、西洋の文明や支那の文明は人蔘牛蒡のやうなものだから、「國體」の消化液にかけて消化して、是が日本の材料の血となり骨肉となる、之を　明治天皇は『世々厥の美を濟す』と仰せられた『厥の美』と云ふのはそれだ、であるから日本と云ふ國は自分の國にさう云ふ機械的の文明は有して居らぬが、消化液と云ふ文明の原液があるから何でも十分にこなし得る、斯くてその能判能融の大能力を發揮して、終に世界の文

明を調整統一するのである。

三十　日本は根なり

佛教でも儒教でも日本で拵へたのではない、他の飯を食つて拵へたものだ、又織物だとか繪を畫くことゝか彫物とか云ふものも朝鮮から來た、三韓の文明をそつくり持つて來た、支那の文明も大分來た、笛を吹いたり太鼓を叩いたり碁を打つことから茶をたてること、一切支那から持つて來た、昔は支那の事を「もろこし」と云つた、是は彼の國から、もろ〳〵を越し來るから「もろこし」、それでは向ふが「から」になるだらうと云ふので「から」と云ふのかも知れん、餘りからになつたからあとがシーンとして仕舞つたので「清國」といふわけかもしらん、何でも外國の文明を持つて來て日本の文明にすると云ふのは、旦那樣が座敷に坐つて居て下男が畑から牛蒡や人蔘を採つて來、海から魚を捕り池から鯉を捕り、野から牛を捕つて來て牛の乳房から牛乳を搾つて來る、それを砂糖と味淋で味をつけてお饗どんがサア召上れと座敷へ持つて來

る、その据膳に對つて箸を執つて食ふ樣なものなんだから、決して西洋の文明だの支那の文明だの印度の文明だのと云つて隔つべき物でない、佛教が日本へ來た時『是は印度の教だから日本に入れてはいかぬ』と云つて頑古黨が之を拒んだ、後　聖德太子が之を融和して印度の教、支那の教と云ふことはない、皆日本のものだと云つて聖德太子の方が私より先に、千三百年も前にさう云つた、世界各國の文明は皆日本の文明ぢや、日本といふ國に根があつて、其枝葉が支那だの西洋だのに行き、其花と實が天竺へ行つて居ると　聖德太子は仰せられて、『儒教は枝葉なり佛法は果實なり日本國體は根なり』と斷定なされた、日本の道が根、花と實が天竺の佛法だ、枝葉が支那の儒教だと云ふ、其時分には西洋のことはない、西洋は未ださう勃興しない、勃興すれば矢張り同じこと枝葉の中へ這入るのである、かういふ風に世界と云ふものを一個に見て仕舞つた、世界を一つに見れば、其世界の中の頭とか尻とか云ふだけの違ひなんだから、どの國もこの國もない、今西洋の文明が日本に這入つて來たからと云つて、他國のものが日本へ來たと云ふのではない、日本の此消化液に依て消化されべき運命を以

て西洋の文明が日本に來たのである。

三十一　中心の集綜力

日本から見れば西洋も日本の國なんだから、お座敷はこつちにあつて離座敷が向ふにある、物置があつちにあつて臺所がこつちにある、一軒の家だつて清い所の部分もあれば汚い部分もある、表へ出た分もあれば隱れた分もあるだらう、それをどれも一緒には出來ない、床の間は綺麗だからと云つて家中皆床の間にして置く譯にもいかない、世界も一つの家で、其家の中でそれ〴〵役割がきまつてゐる、哲學宗教のやかましい印度のやうな所には佛法が出來、禮儀典禮のやかましい國柄の支那には儒教のやうなものが出來、生存競爭の甚しい國柄の西洋には機械工藝が進歩する、此世界といふ大きなものゝ文明が究極に至つて何物にかこなされる運命をもつて居る、總ての文明をば消化して一つの中心の中に集める、其力を持つたのが卽ち日本の國體である、さう言ふと唯日本ばかりえらくするやうに當るかも知れぬが、それは仕方がない、何

所の國にも斯う云ふ自覺を以て肇まつた國は無い、昔から我が家は人間の爲に正道を護る所の役目ありと云ふ御自覺を以て此國を建てられ、天皇の位にお卽きになつて尙將來も此道を擴張せねばならないといふので、神武天皇は其建國垂統の大宣言として、『上は乾靈國を授け給ふの德に答へ、下は皇孫正を養ふの心を弘め、然る後に八紘を掩ふて宇となし六合を兼ねて都を開かん』と仰せられて天皇の御位に卽かれた、實に堂々たる大宣言だ、世界を以て一つとなさんければならぬと云ふ思召だ、而し弱い國をいぢめてこつちのものにしようと云ふ意味ではない、切取强盜と云ふ意味ではない、今の世界で戰爭して强い國が他の弱い國を取ると云ふ筆法でやつて居るから、それと同じに考へられては引合はぬ、さうではない「道」です、正義を擴めやう正道を護らう、此道に從はないものがあれば擊たう、此道に集まつて來ない國は綱を以て引掛けても之を寄せよう、斯して世界を一つにしようと云ふ大理想を以て建てられた、さう云ふ公明なる主義によつて建つた國がこの日本だから、其心を得て此國を整理する、此國の民となつてその仕事の手傳をする、斯う云ふのが『國體の自覺』と云ふの

である。

三十二　恥づべき退嬰思想

國民として其國を經營する心がなく、只自分ばかり宜ければ可いと云ふ考のみで、目前の國家を顧みず、只管後生とか未來とかに慮心して、一切の努力を否認し、何かなしに他力々々とばかり、難きを避けて易きに就くといふのは明かに亡國の思想である、隨分汗水たらして此實世間の人間が、現實の力を奮ふて稼いで拵へた金をば藁包(わらつと)苴に入れて本願寺へ持つて行つて納めるとか、食ふ物を食はないで溜めた百金千金を阿彌陀樣に上げて、『此金をあなたに差上げます、どうぞ私の未來をお救ひ下されて極樂淨土へお引取りを願ひます』と云つて拜んで居る人がある、金は本當に通用する金だ、通用する金を供へ何の用でも出來る人間が、愚にもつかぬ未來のことをお願ひして、十萬億土へ引取つて呉れろと云ふことの爲に金を持つて行く、こんな詰らぬ事にさへ此位慾のある人間なら、今此世の中に極樂を作り出すと云つたら、千倍萬倍の力

を奮ひさうなものではないか、尤も阿彌陀様に向つて引取つて下さいなんと言つても若し阿彌陀様が『さうか、よし直に引取つてやる』と言つたら、『それではどうぞ少々お待ちなさつて下さい』と言つて逃げ出すかも知れない、是は信仰と云ふよりも一種の習慣です、何だか阿彌陀様！　と聞くと何となく有難い、そこへ坊さんが出て來て少し念佛の效能などを話すと、體がしぼむやうになつて、何だかムヅ〳〵痒くなるやうに有難くなつて來る、一口に信仰と云ふけれども、こんなものは病氣の部類である一種の精神病です、慢性阿彌陀病とも云ふべきものである。

三十三　難きを避けんとするは亡國心なり

阿彌陀様ばかりではない何でもさうだ、さう云ふのは法華の方にだつてある、理窟もへちまもなく、太鼓をどん〳〵叩いてブリキの空罐などを鳴らし、お祖師様に恥をかゝせるのも知らないで鈍怒誇やつて居るのもある、そんなのは慢性ドンヂヨ病だ、病的信仰はいかない、健全な信仰でなくてはならぬ、さうかと思ふと唯ベソ〳〵泣いて救だの慈善だのと言つて居るのもある、こんな『無理性』な『劣感情』な不精なつぐい觀念が、國民の信仰となつてゐては大變だ、打遣つて置いてさへ不精をしようとして居る、『仕事は大勢でする食物は小勢で食ふ』と斯う云ふ主義、さう云ふことをば冗談半分にも、吾々は子供の時分に聞かされて、成程是は道理だと考へて居たものだ、後になつて是はとんでもない思想だと云ふことも分つたけれども、其時分には尤もだと思つて居た、何も學校で教はつたのではないけれども、誰となくそんなことを言つて聞かせるから成程さうだと思ふ、そんなことを眞にうけて、成るたけ用はしないやうにしよう、樂をするやうにしようと云ふ所から、むづかしい事はするな、法華經などは難行と云つて修行がむづかしいからそんな事は止せ、念佛の方は唯南無阿彌陀佛と唱へさへすれば引取つて呉れる、お任せして置けば宜い、南無阿彌陀佛と唱へぬでも唯唱へやうと思ひさへすれば宜い、是は非常に埒が早い、一切南無阿彌陀佛で義理も理窟も要らない、此位やさしいことはない、極惡深重の凡夫は大慈大悲の阿彌陀様を頼むより外はない、むづかしい事はしない方が怜悧だ、法華經は貴いだらうけれど

も吾々の機根に能はないと言つて斥ける、さうして世話のない南無阿彌陀佛が宜い、何でもむづかしい事はいかないからやさしい方に就かうと云ふ、是は誠に宜くないことであらうと思ふ。

三十四　百德は勤勉より起る

むづかしい事を我慢してやれと教へなければならぬ、實際は何もさうむづかしいことはない、考へて見れば藁苞苴の中へ金を入れて本願寺へ持つて行く方が餘程むづかしい、論より證據一生懸命になれば何でも出來る、ふだんは力の無い者が、火事でもあると重い二十貫目もあるやうな箪笥を脊負つて出て行く、火事が止んでそれを持つて歸らうとする時には中々擡上がらない、さう云ふ譯だから一生懸命になれば持てると云ふ原則だけは確かだ、持つて歸る時にも一生懸命で、五割引でも宜いから我慢してやつたら宜い、成たけ樂をしよう樂をしようといふのは成たけ不精をしよう不精をしようと云ふことで、それはいけない、人は怠ると云ふことが一番わるい、嘘をつくこ

とでも人を殺すことでも一切その根源はなまけるから起る、それから一切の道德の源は勉めると云ふことから始まる、勉强です、勉めてゐれば金も出來る、怠れば碌でもない者になる、溪川で何とかいふ槍みたやうなもので魚を突く商賣がある、流れて來る魚をつーッと突く、初めはなか〳〵突けないが、商賣だから仕方がなしにやつて居ると、終ひにはどんどん突けるやうになり、終に何とか云ふ槍の名人になつた、槍を稽古しようと思つたのではないが、寶藏院の先生にも劣らぬ者になつた、一生懸命になれば其位の功は現れる。

三十五　百惡は懈怠より起る

勉めると云ふ位貴いことはない、怠けると云ふ位惡いことはない、怠けると云ふのは不精をしようと云ふので、不精をしては人間と云ふ者は何も出來なくなる、本當に不精になると、自殺するより外仕方がない、自殺するにしても華嚴の瀧へ行くのは面倒臭い、鐵道往生も痛い、川へ飛込むも冷い、首を縊るのも面倒だ、愈々食はずに死

ぬより外はない、是は一番樂だ、或不精な奴が辨當を脊中へ脊負つて居て途中で腹がへつた、下ろして食べやうと思ふけれども下ろすのが面倒だ、腹は段々へつて來る、どうか好い工風はないかと思つて居ると、向ふから人がやつて來た、あの人に下ろして貰つて食べやうと思つて待つてゐると、向ふから來た人は口を開いて居た、ア、口を開いてるから多分あれも腹がへつて居るのだらう、あれに談判して一つや二つやつても宜いから下ろさして食はうと思つて、『時にお見懸け申せばあなたは口を開いて歩いておゐでなさるが定めて腹がへつたんだらう、私の脊中に握飯があるが、これを下ろして食べるのが面倒だ、物は相談だが、あなたに一つ上げるから下ろして私の口へ入れて呉れないか』と懸け合つたら、上には上のあるもので、『イヤどうして、私はさつきから笠の紐が解け掛つてゐるが、之を結ぶのが面倒だから口を開いてゐるので、中々人の世話どころではない』と言つたさうだが、此位の馬鹿々々しい話になつて仕舞つたら國家もいよ〳〵大變だ、笠の紐さへ結べない、辨當さへ下ろして食へぬと云ふやうな奴は、此社會の奮闘場裡に立つて何事が出來るか、唯亡國の民たるばかりだ、

殷の鑑み遠からず元の朝鮮を御覧なさい、少しばかり働いて食ふだけあれば金は拵へないと云ふ主義、是は政治が悪くつて官吏が誅求をする爲に官吏に取られて仕舞ふから、それが爲に怠けるやうになつたんださうだ。

三十六　國體の色讀

日本も朝鮮を笑へない、そろ〳〵かぶれて來た様だ、それでは慾が無いかと云ふと慾はある、始末にいけないほど慾があつて、それで居て怠けやうと云ふのだ、即ち矛盾です、懶ける代りに慾も無いと云ふなら宜いが、仕事はしまい、けれども慾はある、そこで嘘をつかなければ追付かなくなつて嘘をつく、働くのは面倒だから手取早く胡麻化して取らうと云ふことになる、勇猛精進で何でも働かなければいかぬ、明治天皇は「勉める」と云ふことを一切道德の標準となされた、御自分は十善萬乘の御位に在らせられたにも拘らず日曜さへも御休みにならず、寒さ暑さにも寒暑をお避けにならず、汲汲として民の爲に善政をお執りになつた、之でも足りないあれでも足り

ないとして、孜々としてそれが爲に精神を疲勞まし〳〵た結果が御病原となつて、非常なる偉大なる御性格、御體質も立派な御體質であつたにも拘らず、日露戰爭以來身心過勞の結果として、此間の御病氣をお起しになつた、實に是は吾々國民の爲に御身體をば削つてお終ひになつたやうなもので甚だ以て畏れ多い事である、　明治天皇が吾々にお下しになつた賜は、最前も申しました通り第一が人道の正義、第二が政道の正義、其上に人道政治の根源たる所謂道本理原たる國體の體達を示現せられた、凡そ國家を論ずる者、日本國を論ずる者、就中　明治天皇をば研究せんとするものは、先づ第一に是を考へなければならぬ。

三十七　祖宗の遺業に對する大責任

憲法を御制定になるに就いても、先刻も申しました通り、一年有餘に亘る永い間、肱掛の附いた椅子にお坐りなされても、嚴格なる態度を以て、一日も御休息をなさらずに精勵勤勉なされた、それはこの憲法の善いと惡いとは、國の消長に關することであるから、それ程に御心を用ゐられた、けれども　明治天皇の御心の中には、それよりももつと大きな基礎がある、其は　皇祖皇宗の遺訓である、曾て某大官が、米國の觀光團を歡迎する時の言葉に、『日本の文明は米國より得た文明である、卽ちペルリに依て日本の文明は得たのである、米國は卽ち我が文明の恩人である』と云ふことをば內外國人の大勢居る晴の席に於て演說をした、私は甚だ憤慨に堪えぬと考へて駁論したことがある、成程電氣燈をつけたり蒸汽を走らせたりすることは、外國より來たものに相違ないが、それよりも大きい日本の精神の文明といふものは、亞米利加から貰つたものでもなく、他の國から貰つたものでもない、現に此御位の主たる　明治天皇の勅敎の中に於て『斯の道は皇祖皇宗の遺訓』と仰せられた、ペルリの土產だとは書いてない、ところが憲法政治と云ふものは西洋の眞似をしたんだと考へて居る者もあるが、是は大變な違ひで、憲法政治の發達は西洋の方が一足先きに發達したか知らないけれども、憲法政治の大主眼、其實質は日本に疾くの昔から既にあつた。

三十八　世界最古の憲法國

日本は古より政を行ふに憲法政治を本としてやつて居る、それは　神武天皇の建國を始め御代々の天皇の詔勅に於ても明かであります、又ずつと遡つて神代の昔でも大勢の神樣をば方々の國々から集めてお謀りになる、所謂神集ひに集ひ神謀りに謀らせ給ふ、卽ち帝國議會は西洋の眞似をして俄かにやつたのではない、日本には日本の法がある、　聖德太子は旣に治國の大本「十七憲法」をばお作りになつた、此十七憲法は今日の憲法とは自から內容も違ひます、違ひますけれども兎に角憲法と云ふものを作つて、其憲法の下に政治を執ると云ふ標準を與へたのは、確に日本が外國に率先して居る、其時の都合に依てやるのでない、　聖德太子が旣に先鞭を著けさせられてゐる、であるから、明治天皇は　皇祖皇宗の遺訓と仰せられた、憲法發布の詔勅に『皇祖皇宗の御遺業をば擴張する爲に玆に憲法を發布するぞ』と仰せられた、西洋に則つたとは仰せられぬ、今日の文明國の風潮を照合して差支のないやうにして、先祖の道

をば世の進運に乘じて世の中に發布するぞと斯う仰せられて只新たに分明に人民に參政の權をお分ちになつたまでゝある、憲法でも其通り、況や父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信ずるの人倫問題に至つては猶更の事、皇祖皇宗の遺訓だと仰せられた、此　皇祖皇宗の遺訓だと云ふ根源は「勅敎」の初めにも仰せられた通り、『國を肇むること宏遠、德を樹つること深厚』とある、國を肇めるとは何だ、國を肇めると云ふのは國家の組織をなさると云ふことばかりでない、國の魂たる正義正道を養ふことだ、神武天皇の御事業は「養正」と云ふ二字で彰はしてある、正を養ふ！　養ふは保護するので正義を保護する、「正義」と云ふのは眞理を人間の行ふやうに仕立てたものが正義、「道」といふのはこつちから向ふへ行くのが道だ、人間の行ふ道、佛になるのも神になるのも道と云ふものを外れては行かない、東海道より京都へ行く、奧州街道より奧州へ行く、其道を行けば目的地へいかれる、東海道を通つて奧州へ行くと云ふ譯には行かない、因果必然ちやんときまつて居る、それを「道」と云ふ、人間になるには人間の道を行はなくてはならぬ。

三十九　天地の公道

そこで今吾々は人間である、人間である以上は人間の道を行はなければならぬ、人間の道と云ふものは何所から出て來た、人間の道は人間だけで拵へるか、人間以上のものと何か聯絡があるか、ありとすれば何所から聯絡が付いて居るかと云ふと、人間の道は人間だけで拵へた道ではいけない、人間より以上の者の作られた道と一つになつて居らねばいけない、人間だけで拵へた道は人間だけの通用で他へは決して通らない、例へば『牛は人間の食物だ』と斯う云ふのですね、吾々も牛は食ふけれども、人間の食物だと思つては食はない、牛は人間の食物に出來たと云つて食つては牛に對して相すまないのです、然るに西洋ではさういつて居る、耶蘇教ではさう云ふ理窟を許して居る、神が人間の食物に拵へたんだと云ふ、是は人間には都合が好いけれども牛には都合が悪い、牛がそれを聞いたら怒るだらう、『怪しからぬ奴、吾々は力の競爭の戰には負けて居る、仕方がないから食はれるのだ、それを食物だ權利だとして食はれ

ては堪らない』と斯う云ふに違ひない、牛が何も理窟を言つて來ないから可いけれども、假に牛が理窟を言ふものとしたらさう言ふだらう、又誰か牛の代言人になつて物を言へば結構理窟は通る、私がやつても通る、魚でもさうだ、之を人間の食物だときめて仕舞つたら向ふは承知しない、食つては居るけれども、其はこつちが強いから向ふの弱い奴をばいぢめて、ずるけて食ふ、是は生存競爭の世の中で仕方がない、人間はあらゆる點に於て優れて居るから、劣つたものを殺して食ふと云ふことは、事實ではあるけれどもそれは道ではない。

四十　普遍性の功用

人間だけの理窟であつて萬物に通用した道でない、佛法は萬物に通用した道でなければ許さぬ、人間だけで拵へた道は、昔大名が拵へた札と同じことで、其領分だけしか通用しない、今日本銀行で拵へた札は日本中何所でも通用する、日本銀行といふものが札を發行するに正貨の準備と云ふものがある、一圓の紙幣を出すに就いては、紙

幣そのものは紙だから十錢の値打もありはしない、けれども其紙の裏には、この一圓札一枚に對しては正金一圓と云ふものは取つてある、何時でも引換へてやると斯うある、一々引換へに行く者はありはしないが、行かないでも引換へられるとしてあるから日本國中通用する、ちやんとそれだけの保證が付いて居る、若し保證もなく正貨の準備もなく、政府が財政上に信用を失して仕舞へば、紙幣と云ふものは通用しなくなる、其信用の根元は實貨實力の充實にある、銀行も其通り、いつ行つても銀行で支拂つて呉れると云ふから、證文一つ入れないで通帳一つで取引する、銀行といふものは信用が大切である、それであるから、どうかすると詰らぬ内情の破綻などを針小棒大に吹聽されると、取付けに逢つて銀行が迷惑する、私も曾てある銀行を救つたことがあつたが非常に困るらしい、尤も中には全く圖々しいことをやる奴も稀にはあるから仕方がない、要するに正貨の力とか信用とかは普遍性の功用を有したものである、眞理大道も亦その通りで、人間でも神佛でもどこへでも通用しなければならぬ故に、人間の仲間だけで通用して萬物に通用しない理窟ならば、それは公道とは云へない。

四十一　神人の交通

所謂公道は何物に向つても差支のない道でなければならない、それが正道だ、牛が聞いても豚が聞いても鮪が聞いても鰯が聞いても、どちらからも御尤もと云ふ道でなければならぬ、それには何所から出た道が一番宜いか、畜生や地獄から出て來たものはいけない、神とか佛とか云ふ方から筋を引張つて來たもの、さう云ふ貴いもの卽ち聖者が裏書をしたものでなければ通用しない、そこで「神人の一如」と云ふ必要がある、神樣と人間と交通する必要が起つて來る、神の心を人間の心に移す、神の心と云ふものは何だ、佛法で言ふ菩薩の心とか佛の心とか云ふ、正しい道を行ふ心である、先天的に正しいばかりでなく、後天的にも正しい道を行ふ、耶蘇教の神樣は修行も何もしないで元から尊い有難い神樣であると云ふ事だが、何所から出て來た神樣か分らない、どうしてあるのだかも分らないときめてある、人間が神樣のことを彼此れ言ふことは出來ぬとしてある、佛法では人間でも神樣になれゝば畜生でも神樣になれる、

どう云ふものでも其道を行つたものは行つただけの果報は得られる、人間をすつかり仕上げて完全な人間にすれば行止まる、其行止りからもう一つ上へ行けば、人間より上へ出る、丁度小學を卒業して中學に行き、中學を卒業して高等學校に行き、高等學校を卒業すれば大學、大學を卒業して學士になり大學院に這入り、それを卒業すれば博士になる、それから先きは世の中の學校と云ふもので幾らでも立派なものになれる斯う云ふもので段々と上から上へと向つて行つて修行をして行けば、終には一番の頂上に達する、それが佛教で申すと、佛といふので卽ち大なる神格である、であるから阿彌陀樣であらうとお釋迦樣であらうと、無因自然の佛樣はない、因て來る所がある阿彌陀樣でも寶藏比丘と云ふたゞの人であつたが修行して佛樣になつた、お釋迦樣でも凡夫であつた、それが修業して佛になつた、どんな尊い佛樣でもみな「道」を行つたものだ、其神樣佛樣を手本にするのだから、其手本に電氣が通じて居る道でなければ本當の道でない、上から下の方まで何所へ行つても、雙方が故障を言はないで、平等に承服する道でなければ天地の公道ぢやない、天地の公道でなければ、吾々の行ふ

べきものでない。

四十二　人間は虱の食物にあらず

單に牛は人間の食物に出來たと云ふやうなことは、人間の仲間では通用するけれども牛の方には通用しない、牛は之に對して必ず抗議を申込むであらう、强いから弱いものが食物になると云ふならば、虎と人間と對して置くと一匹取換なら人間は虎に食はれて仕舞ふ、加藤清正と云ふやうな人は別として吾々のやうな者が虎に對すれば虎に食はれて仕舞ふ、さうすると人間と云ふものは「虎の食物」に天が作つたと言つたらどうだ、虎なんと云ふものは强い爪もあれば體も大きい、大分もとでが掛つて居るが、もつと簡單なもので人間を食物にして居るものがある、それは何だと云ふと蚤や虱だ、虱なんと云ふやつは大威張で人間を食物にしてゐる、世の中に此位贅澤な食物を食つて居るやつはあるまい、さればとて人間は天が「虱の食物」に作つたとは言へまい、太田南畝と云ふ人が「愛虱の記」と云ふものを書いたその中に『凡そ世に憎む

べきものは蚤と蚊と蠅と蜂なり、虱は其形至つて靜かにして少しく仁者の風あり、形を襦袢の裏に隱し交りを縫目の間に結び、人を食つて悠々然として怖れざるものは豪傑の風あり』とかあつた、太田南畝は虱に親類でもあつたか知らないが大變褒めて居る、此筆法で人間は虱の食物なりとされて仕舞つては堪らない、だから、小さいものでも人間を食ふやつもあるです。

四十三　順當なる生存競爭

けれども往昔から人間が肉食をせんければならぬと云ふ必要上、諸の動物をとつて食つて居た遺傳があつて、それで今日まで肉食をせんければならぬと云ふので魚や獸のやうなものを食べる、それは人の齒が野菜を食ふ齒と肉をこなして食ふ齒との二つある、臼のやうな形の齒は野菜をこなす齒で、それから牙のやうな刄物のやうな齒が肉類を食ふやうに出來て居る、此構造から考へれば、穀食も肉食も天賦の必要上食べる、强いものは弱いものを征服して食べるので、必ず何を食べると定つたものでもな

い、有る物を食べる、けれども鰊などは「數の子」と云つてどつさり子を持つ、一匹からあれだけ澤山の何萬と云ふ子を持ち、あれが正直に孵つて其二代目の鰊が又澤山の子を持つ、さう云ふ風にして五六代も經たうものなら、世界中鰊だらけになつて仕舞ふ、他の水族が來て啖ふから新陳代謝して居るのかも知れぬ、梅や桃でもさうだ、一本の樹に梅がどの位生るか分らぬ、大變なもの、私の所にも梅があるけれども梅時分にはどつさり實を採る、一本の木に五斗も六斗も一石も生る、あれが一つ一つ樹になる、其樹から又五斗も六斗もの實がなつて、正直に是が鼠算で行つたら、終には世界中皆梅になつて仕舞ふ、皆々各々蕃殖の道は立つて居るけれども、色々の巧妙なる障害に依て差支へて仕舞ふから、工合よく淘汰されて宜い鹽梅になる。

四十四　人本位と道本位

食物と云へば天地間互に食物になる、但し優勝劣敗の原則に依て、弱い物を取つて食ふと云ふことは、もう一つ高尚なる道德心から言つたならば宜しくないと云ふこと

になる、なぜならば動物がいやだと思ふものをば強いて殺すのは不仁の至りであるといふので、動物を食はないと云ふ高尚なる道德が起つて來る、佛教の肉食を制戒しましたのは一つはそれに依ります、小乘では妻帶を嚴しく申します、坊さんが女房を持つことを嚴しく制禁して、肉を食ふことは比較的緩いが、大乘になると女のことはさうやかましく言はないが、肉を食ふことを非常に嚴しく申します、元は小乘の聲聞と云ふ方のお弟子には肉食を許してありました、所が釋尊御涅槃の時には、『善男子！我今日より諸の聲聞に肉食を許さず』と仰しやつた、要するに動物相食はぬといふのは、人間本位でなく「道本位」の大道德觀から出た最高尚の思想であつて、萬物を平等に本性本體の上より觀察したものである、故に道の標準を最も高い神佛の地點より打算して來て、人間のたよりとするのである。

四十五　治道の聖者

所謂神人感通の道の根元を說いて、三大秘法を建てられたのが、日蓮主義で主張する

る所の正義で、　神武天皇の所謂「養正」である、　神武天皇の時には日蓮聖人は未だお現にならぬ、けれども　神武天皇は日蓮聖人から聞かれなくとも羅什三藏から聞かなくても、前から直接に知つて居られたので、心に存してある眞理を以て『正を養ふ』と仰しやつた、日蓮聖人は後から出て『正を立てる』と仰しやつた、　天照大神は『就て治めよ』と仰しやつた、「就く」とは何だ、「就く」といふことは天から出て來て此地へ下る、上から來て人間へくつ付ける、纏まつて居ないものを纏める、離れて居るものを一緒にすることを「就く」と云ふ、人間の道は別々に成つて居て、人間だけで拵へた道は標準が立たないから、神樣の道とちやんとピントが合つて一つになつて居なければいかない、神樣が裏書をして保證をして居る道でなければいかぬ、そこで「神人一如」、是は神樣の方から人間へ降つて來たので、そこで就て始めよ『葦原千五秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣寶祚之隆、當與天壤無窮者矣』「治める」とは物を處分すること、散ばつたものを整へること、混亂のものをば整理すること、上下の秩序を忘れて居るものを正し、亂れて居るものをば

元の通りに直す、病つて居るのを丈夫にする、之を療治と云ふ、どうも頭痛がして仕様がない、頭痛がすると云へば人間の足が冷える、四肢が冷え頭が岑々として惱む、人間の溫みが片方へ寄つて仕舞ふので、平均に行くべき體溫が上昇して頭ばつかり熱くなる、それをちやんと藥を以て熱が平均するやうに整へるのです、これを療治と云ふ、人間が變挺になつて間違つて居るのを處分する爲に、天から瓊々杵尊を降された時に仰せられたお言葉が「就而治焉」、此治道をば明かにせられたから、天然自然に明治天皇のお名前が付た、　天照大神が「就て治めよ」と仰せられた其治道を明かにせられたる大聖人たる　陛下だから　明治天皇と申し上げるのである。

四十六　「治」と「正」との相關

其　明治天皇の御事業をば大成して行かうと云ふ　今上天皇の御代は「大正」と云ふ、「正」の字が附いた、「正」の字は日本の種字だ、さきにも申しましたが日本の國體の內容は「正」の字、正の字は何であるかと云へば日本に中心を定めること、字で申

しましても、正と云ふ字は上と下と位を匡した姿である、下を上にしたのは、易でも「乾下艮上」と下の方を上にしてある、天地が位を得れば「地天泰」と云つて、是は上下一貫した形、卽ち神人一如の形だ、それからもう一つ字源から言ふと「正」と云ふ字を俗に解釋すると「一に止まる」と書く、上下孰れにしても一の形、神人一如して世界の秩序を正すと云ふ形、先づ頭が上にあつて足が下にあると云ふことは誰も異議はない、手が中間にある、是で人間の位と云ふものが定まる、數から申すと手が二本に足も二本に頭が一つ、此頭を手の所へ持つて來て手を頭の所へ持つて行つたらどうだ、足も數が二本ありさへすれば宜いと云ふので上へ持つて來たらどうだ、どうも工合が惡い、足は下になければいかぬ、手も頭もちやんと各々その所に無ければいかぬ、是が位を正す、數も合ひ位も正されて始めて秩序が立つ、そこで自然と體が引つ繰り返らぬやうに出來て居る、手と云ふものが眞中にあるので上にも下にも屆くやうになつて居る、之を背中へでも附けられた日には飯を食ふ時など尤も困る、それから總ての點に於て大切なものはあたまにある、それだからちよつと何かに觸ると、あゝ

痛いと云つて直ぐ頭へ手が行く、足の方は遲鈍だからさうすぐには行かない、小指の先を一つ切られても痛いことは痛いが、頭ほどではない、勿論尊卑はある、親疎はある、厚薄はある、然れども小指位どうでも宜いと云つて、構はんで拋つて置くと云ふ譯には行かぬ、痛みは小さくても、惱みは身體中の負擔である。

四十七　本因本果の大道

世界の萬物は色々異つて居ても其異つた儘が一つに統一せられて居らなければならぬ、君は君、臣は臣、賢は賢、愚は愚と各々其分類は違つて居つても、正しい道と云ふもので一貫して居るから、ちやうど一つ身體に血液が循環して、頭の上から足の爪先まで、一つの身になつて居ると同じこと、さうして整理せられて居つて、身體中體溫が平均して居るのを「正しい」と云ふ、若しそれが狂つたら大變だ、其身體の中心は何所にあるか、先づ昔は胸、今は腦と云ふ、腦でも胸でもどつちでも宜い、昔は心と云ふ字を「むね」と讀み或は「たね」とも讀む、心（しん）の臟が胸にあつて夫が物の思慮

を司ると考へて居つたからである、若も精神が頭にあれば頭でも理窟は同じこと、何れ括（くく）るものが一つある、其ものゝ命令に依て動いて居る、それが錯亂して仕舞つたならば體は顚倒する、卽ちあらゆる道の根源をば中心に定めて、その中心に依て統一すると云ふことが正義正道である、であるから、國家を統一するには、人の思想からは「道」であるし、國家の組織からは「位」で統一する、位と云ふのは何から來るかと云へば、神樣から來る、神樣が此世を治める爲に、其神樣の御裔をば遣されたのが卽ち天日嗣（あまつひつぎ）の位だ、天皇の位だ、國は「位」で治める、思想は「道」を標準とせんければならぬ、「道」は何であるかと云へば神の內容だ、佛法では之を「因果の大法」と申します、因果の大則を以て神の內容とする、「本因本果」の道が卽ち正道、其正道を失へば、幾ら形が判然として居つても精神が錯亂してゐる、卽ち氣狂ひだ、小野小町でも辨慶でも氣狂ひだつたら用に立たない。

四十八　君臣本位の倫理

そこで釋迦如來も　神武天皇も日蓮聖人も「正道」を說かれた、其道が標準となつて現れた方面から見るときはそれが「正道」となつて現はれ、働きとなつて現はれた方面から見れば其が「忠孝」となる、一言にして申せば一切萬物の本を知るの道を「忠孝」と云ふ、今日の所謂新しい人たちは忠孝と云ふと古い道德だと言ふが、今の人間の思想では未だ分らぬ、今の西洋の文明の程度では日本の國體や國性の忠孝は分らぬ、今に是から分るだらうけれども未だ分つて居らぬ、それが生意氣千萬にも少しばかり西洋人の倫理や何かの書を嚙つて、忠孝なんと云ふことは古い、人間の道德は愛だなどゝ云ふ、焉ぞ知らん「愛」は道德であると共に罪惡だ、親子と云ふ者が道を以て立つから合體して行ける、若し「愛」一點張で立つたら愛の爲に亡びて仕舞ふ、可愛い〳〵と云つてあまやかせば子供は腕白になつて仕舞ふ、愛に依て亡ぼすことになる、夫婦も其通り、愛の成功したものは情死である、お半長右衞門はその成功者である、愛と云ふものが極度に至れば鐵道往生、親子などのことは構はない、君臣のことなどは構はない、唯夫婦で以て仲を好くして手を引張つて歩けば宜いと云ふのが此頃

の人の思想だらう、西洋人は夫婦を中心とし、支那人は親子を中心とし、日本では君臣を中心として居る、親子も夫婦も皆君臣から出て居る、支那では「孝」を以て倫理の中心とし、西洋では「愛」を中心とする、それは耶蘇教から感化を蒙つたことで、夫婦相和するは誠に結構だが、人情本位では「愛」に道がない、愛以前に「道」といふものがある、其道の爲に愛して行かなければならぬ、愛の爲に道を要するのではなくして道の爲に愛を要するのである。

四十九　國と道と位との圓歸

親子もさうだ、唯親だから子だからと云ふばかりでなく、親子の間にも道がなければならぬ、親子それ自身の道ばかりでなく、その親子を統貫して行くべき「大道」がなくてはならぬ、親たりとも大義に背いて謀反人になつた場合は、親を棄てゝ君に附くのは大なる孝行であると、日蓮聖人は仰しやつた、義朝は君命であるからと云つて其親を斬つた、清盛の脅迫に依たのではあるが、道の標準がないから只の不孝である、か

かる場合に武士たる者は自分の命を棄てゝ親の命乞をしたら宜しい、それでも朝廷が許さぬで殺したら是は已むを得ぬ、然るにあれは朝廷が殺さしたのではない、淸盛が爲義を殺せと言つたのを承知しましたと言つて殺したのだからひどい、さう言ふやうに根柢に標準がないから迷ふ、君臣の道でも父子の道でも「道」と云ふものゝ標準を失つたら、何所まで間違つて行くか分らない、何でも物と云ふものは「道」を離れて仕舞つたら煩惱執着の根原となつて來る、佛法では貪瞋癡の三毒と云ふものを說いて愛を以て其一つに數へて居る、佛や菩薩の慈悲も、愛と同性のものであるが「道」を離れた愛は許さぬ、其國に於て其國の主人を愛する、主人に忠義を盡すと云ふことは、祿を貰つて居るからその返禮に愛すると云ふので眞の道でない、少くとも日本の忠孝でない、國の根元が道である、道は我身の本であるからと云つて、我身の本をば培ふ意味から君臣の大義が生れる、此大なる倫理の下に立つた「君臣道」、其君臣道の支配を受けた中に於て孝でも義でも愛でも何でも行はれて行かんければならぬ。斯う立てるのが日本の倫理觀、それをごつちやにして、唯何かなしに忠孝なんと云ふこと

は古いと言ふが、さういふ譯のものではない、此國體の精と云ふものが現れて忠孝となる、此「國體」といふものは今日始まつたものではない、　天照大神の思召、　神武天皇の御理想それが、日本の天日嗣の御位にちやんと附いて居る、であるから日本の帝王の位を踐めば、此家範卽ち家の道を守らねばならぬ、それをば能く御自覺になつて其國體の活きた姿となつて現れ給ひたる御方が古今獨步の明君　明治天皇、だから　明治天皇樣は唯御修養の深いばかりではなく、唯天禀の優れた所の英傑と云ふばかりでない、素より天禀も優れさせ給ひ修養も厚かつたに違ひないけれども、其修養や其天禀や必ず我は神の末である、我は國體を躬に行はなければならぬと云ふ御自覺があつた爲に、此永久無限の盛德を發揮なされたと云ふことは、　明治天皇を解釋すると共に、日本の國體を解決するに於て最大必要なる條件であると私は考へる。

五十　五百年にして王者興る

明治天皇の盛德無窮であるのは國體の活きてお働きになつた結果に外ならぬ、例へ

ば、日蓮聖人が法華經の權化である如く、我は卽ち法華經が活きて出て來たのである
と云ふこの自覺に依て、日蓮聖人は活ける法華經になつて世に立たれた、丁度　明治
天皇が活ける國體として世に立たれたと同じである、『五百年にして王者興る』と云ふ
ことは、天の命數でありませうが、釋尊から五百年目〳〵には、必ず天下を整理する
大聖人が現はれる、日蓮聖人は釋尊入滅後五々の二千五百年目に御出現なされた、佛
法では年期を五百づゝに切つてある、其五百年の五代目に日蓮聖人が現はれた、これ
も亦其通り、國體の御先祖たる所の　神武天皇より二千五百年にして　明治天皇が御
出現になつた、丁度五百年を五ッ寄せた數である、二千五百年にして、此治道に於て
世界唯一の正義たる日本の國體を以て、世界人類の日月としようと云ふ此天日嗣の御
位に卽かせ給ふた、一面覺道の方面より哲理の方面より日蓮聖人が世界を開發し、一
面治道の方面、人道の方面より　明治天皇が現はれ「教育勅語」と「日本憲法」とを
以て、此世界の人文に最高解決を御與へになつた、此兩方から挾んで來て、日本の國
體と云ふものは人道正義の源である、一切人類の根源であると云ふことは　明治天皇

の御出現に依つて知ることが出來た。

又日蓮聖人は自から『日本の柱』を以て任じ、『我れ日本の柱とならん、我れ日本
の眼目とならん、我れ日本の大船とならん』と、建長五年の朝より弘安五年の夕に至
るまで、或は死罪或は流罪、北海の寒山佐渡ヶ島に於ては十餘日も御絶食、裸肌身に簑
笠を着け、軒は六尺、雪は一丈と云ふ艱難辛苦を御嘗めになつたけれども、御自分の
身の辛いと云ふことは一言も仰せられない、此日本國のことを患へ、是ほど迷つた日
本國民が不憫であると云ふて、萬劫末代に法華經をば日蓮の血を流して留めて置くか
ら、我が亡き後も『日蓮先駈けしたり、若黨共二陣三陣と續け』との激勵、七百年後
の今日其梵音は洋々として充ちて居る、日蓮聖人が卽「活きた法華經」であると同じ
く　明治天皇は卽「活きた國體」であるから、その一言一行の微に至るまで、俱に無
限洪大の御人格が現はれて居るのである、その

□限りなき御仁慈……に……天恩百姓に普及し
□汲々たる御精勵……に……維新の百度擧がり

□天の如き御寛大……に……世界の平和維がれ
□絶大なる御勇武……に……人道の正義持たれ
□泉の如き御文藻……に……皇猷帝道世に顯れ
□日の如き御明鑑……に……人材各々其所を得
□高潔なる御儉素……に……國用豐かに充足す

等の種々の御盛德は、その根元深く國體の御自覺より來つた體達の發現であります、故に　明治天皇はお崩御れになつても其偉大なる光明は一年十年、百年千年となれば
なる程世界に光明を放つて宇内萬國の者をして我　明治天皇を眞底から仰がしめる時節が來るといふことは疑ふべき餘地がない、吾々日蓮門下の者は先づ第一番に國家の爲に盡す唯一の貢獻として、身命を捧げて此誓ひを遂行せんければならぬ、それ等の精神、それ等の主義に依て此『本化行學會』と云ふものも建てられ、さうして此數多の會員達が、大部分青年であるにも拘らず、此道の爲に努力して、莫大の金を使ひ多くの勞力を傾けて、諸君の爲にこの講演會を開いて正義を聽かせやうと云ふ、其志だ

けでも聖人の道を守る精神が乘移つたものである、諸君も其清い心に合體せんければならぬと云ふ自覺を起されて、相共に携へて正義の爲め公道の爲に盡されんことを希望する次第であります。

（をはり）

國體の權化明治天皇

昭和十八年九月十五日　印刷
昭和十八年九月二十日　發行
（五、〇〇〇）

國體の權化明治天皇
（送料八錢）
定價六十錢
特別行爲稅相當額壹錢
賣價六十一錢

著者　田中智學
發行者　鹿山實
東京都下谷區上野櫻木町一
印刷者（東東一）　肥後盛武
東京都牛込區榎町七
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

著者
檢印
田中
21146
出文協承認

發行所　東京市下谷區上野櫻木町一　株式會社　天業民報社
振替東京五三九九三・電話根岸九二
（會員番號一一九五〇五）

終

賣價61錢（税共）